

羊歯

第31号

支部結成45周年記念号

支部ニュース500号発行記念号

2001(平成13年)

新ハイキングクラブ 横浜支部

誌名「羊齒」(しだ)の由来

SHC横浜支部の文集「羊齒」は、支部が発足して、まだ毎月の会報もない頃から年に数回発行され、いわば会報の代わりのような役割を果たしていたようです。会報が初めて発行されたのは昭和34年11月で、その後も「羊齒」は年に数回発行されてきました。会報のファイルは歴代の支部長から受け継がれて残っていますが「羊齒」は残念ながら現存していません。私の手元にあった「羊齒」24号の末尾に、要約次のように書かれています。

これは申し送りのようなものと受けとめて、ここに再掲します。
(熊谷)

*「羊齒」の誌名の由来は当支部設立者の一人【浜野条治】
氏によって命名された。これは「しだ」の研究家である
【行方沼東】^{なめかた じょうとう}氏を友人にもつ浜野氏も山旅の毎に「しだ」
を収集していた。これにあやかって「羊齒」とした。

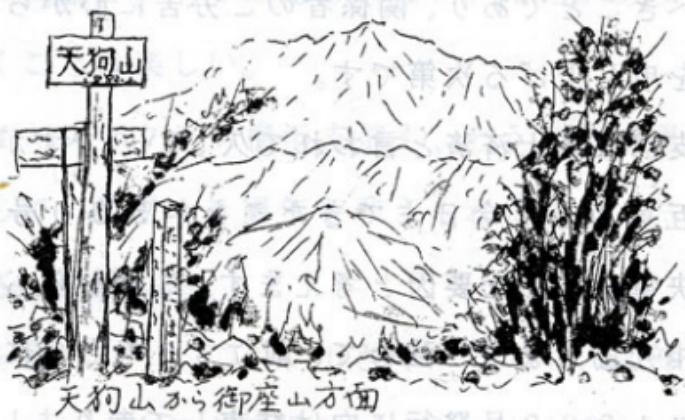
羊歯

第31号

支部結成45周年記年号

支部ニュース500号発行記念号

2001(平成13年)



熊谷 松治

「羊齒」第31号発行に寄せて

支部長 小池 廣治

横浜支部創立45周年を迎え、会員の皆さんと共に喜びたいと思います。45周年は本年3月の支部ニュース500号発行と重なり、2重の喜びであります。

ご承知の通り支部の運営は山行、例会、会報の3本柱で成り立っています。このうち会報の作成は技能を要するため、誰でも出来るというものではありません。その会報が500号も休むことなく続いたことは感嘆すべきことであり、関係者のご労苦に心から敬意と感謝を申し上げる次第です。

当支部は多士済済と言われて久しいのですが、多士が相互協力して今日までできたことが500号達成という快挙を生んだ要因と考えます。これからも支部伝統の相互協力をより強めて、創立50年さらに支部ニュース1000号発行に向け結束して参りましょう。

最後に「羊齒」の発行に尽力された編集委員各位に深く御礼を申し上げます。

平成13年(2001年)3月

出典 小林 美智子
祝 横浜支部創立45周年
三浦恵子 吉田 晃一郎

小林 玻瑠三

山を歩くことが楽しいということ。その楽しみを多くの人に知らせ、その仲間を造ることが新ハイキングの発想の原点でした。

現在でもその気持ちは変りません。この一月にも、92才で、平日グループの仲間と、頭高山を歩いてきました。

山では、都会の中では見られない、発見があります。山を歩くことは楽しい。

・新ハイキングクラブ横浜支部も、そうした仲間の集まりとして、創立45周年を迎えたこと、お目出度うございます。

支部を大きくするのも、小さくするのも、支部員の力です。楽しい支部を目指して、ますます盛大になることを、横浜支部に期待します。

「羊齒」第31号発行に寄せて	支部長	小池 廣治	
祝 横浜支部創立45周年	新ハイキング社社長	小林玻璃三	
1 支部ニュースの思い出	北村 褒		1
2 支部ニュース500号に寄せて	熊谷 松治		3
3 支部会報の思い出	星野喜美子		4
山 紀 行			
4 山行の思い出あれこれ	石原 弘之		6
5 冬の上高地	斎藤 郁夫		8
6 続 私の山旅ファイル	茂木 武		11
7 徳本峠と霞沢岳	芹沢 隆久		15
8 芦別岳(1727M)に登る	飯島 和子		17
詩 歌			
9 川柳	長谷川美江		18
10 香港に生きる	古谷 芳子		19
エッセイ			
11 山行の思い出・その後	星野喜美子		22
12 「ばけもの」と呼ばれて	木滑 清一		23
13 花旅	渡部 詔子		25
14 子供たちと登った山	細井 陽子		26
15 旅の思い出	小池 廣治		29
16 私の山登りと舞岡公園	波多野良枝		31
17 登山靴	佐野淳一郎		32
18 痴と友達になって	丹下 友恵		34
19 思い出・当今・夢	森脇 弘		36
20 スギとヒノキの区別がつかなかつた	岡野 達		37
21 みらいに向かって	村田 真理		38
22 細やかな楽しみ	井上 忠秋		39
23 アンコールワットを歩く	祖父川精治		41
24 外国語の楽しみ	永井 和男		43
25 山のプランをたててみよう	澤野 正明		47
新ハイ横浜支部小史			49
支部山行実績			50
会員名簿			61
編集後記			64
コラム 羊齒の由来について	熊谷 松治	表紙裏	
コラム ハイカーのための読まなくてもすむ読書	伊東 直子		30
コラム 中央線鉄道唱歌 拾遺	永井 和男		48
カット 飯島 和子・伊東 直子・岡野 達・川野奈津子・熊谷 松治			

【支部ニュースの思い出】

北村 裕

毎月、皆様がご覧になる支部ニュースも、私が入会した昭和51年当時は、部員も30人足らず、山行回数も月に1~2回、山行参加者も一回に3~5人位だったと記憶している、そんなわけでニュースも、葉書で間にあっていたのだが、やはり情報伝達にはもう少し字数が欲しかった。だが新入りの私には何も言えなかった。

でも入部して2年目の53年度に、私が支部長に選ばれたのをきっかけに、ニュースに山行報告、その他連絡事項を乗せたく、熊谷さんに無理を云ってB5版にて製作して頂いた、当時はまだワープロ等もなく、一字一字手書きにて原紙を起こしガリ版刷りにして、製版して頂いた。例会近くの休日などは何度か山行にも参加されず、本当に、口ではいい尽くせぬ程の時間と労力を費いて頂き、また勤務中に大怪我をされ入院されたときも奥様などのご協力により、私の支部長12年間任中10年近くも一度も休むこともなくニュースを担当して下さった熊谷さんに、この場をお借りして改めて、深くお礼を申し上げたいと思います、本当に有難うございました。その間にあった、今でも忘れられない、本人にとっては不本意だったかどうかは推察の余地でしかないが、今でも良く有ることだと思うが、山行には参加したいが報告が苦手だとかいう人が当時もたくさん居た、私もその中の一人だったが！！

さて前置きが長くなってしまったが本題にはいろう。

それはある年の1月下旬の山行で、雪がうっすらと積もった茅ヶ岳に登った時の事途中で一本入れようと、雪の斜面に一列になって休んでいる時、リーダーの横山さんが、それらの気持ちを察したのだろう、ザックの中からイチゴのバックを取り出して端に座っている人から一個ずつ取り、無くなった人が今日の山行報告をか書くんだと気を使ってくれた、最初のうちは皆、安心して食べて居たのだが、2まわり位してちょうど無くなり、運が良いのか悪いのか、横山さんの前の人で終わって了我的自分で山行報告を書くことになり、みんな安心して喜ぶやら、気の毒がるやら、寒さも忘れて大声で笑い合った事もあった。

その後、普及し始めてきた、ワープロにて茂木さん、星野さんなどが担当してくださり、その間に私もワープロを購入、取扱説明書と首っ引で、2年ほど担当している内に、母がガンにかかり、医者より良くて半年と宣告され、入退院を繰り返すためニュースの担当を辞退し今に至っている。

またこんなこともあった、石原前支部長の故奥様が手書きにて一生懸命、ニュースを作つて下さったとき、深くは考えなかつたのだろうが、ほんの一部の人がワープロにくらべ読みにくいなどと云う不平を叩いているのを耳にした。そうゆう方に限つて自分が担当になるとは一言も云われなかつた。また進んで自分がニュースを作ると言つながら、わずか3ヶ月で降りられた方もいらした、それ程ニュースをまとめるのは大変な事だと云ふことを忘れないで下さい。

今でも時たま、誤字、脱字等が有るとまるで鬼の首でも取つたみたいに云ふ人が見受けられるが、ご自分で担当なさつてみれば分かるが、人間で有る以上ミスは誰でも有ると思う。決して、わざと間違つてゐるのではないのだから！！

毎月、手元のニュースを見るとき、担当して下さつてゐる方々のことを、たまには思い出して、新聞を見るのとは違つた、暖かい感謝の気持ちで読んで上げて欲しいと思います。

支部員の数も私の入った時に比べ、約2倍以上になつたせいか、あちこちから不協和音が聞こえて来ますが、同じ趣味の人が集つた会なのですから、互いに助け合い、仲良く協力し有つて21世紀の横浜支部を【居心地の良い会】にしようでは有りませんか。

今回は題名の如く【支部ニュースの思い出】と云ふことなので編集製作に過去、現在へと携わつて下さつてゐる方々に心の底より敬意を表したいと思います。

また新しく入会された方々にも親密感を持つて頂くために、ご本人の了解も得ずに実名を略さず使用させて頂きました。又この方たちの他にも多くの方々も居られたことだと思いますが、私もほけて、忘れて了いましたので悪しからずご了解ください。

以上



大谷崩れ



支部ニュース 500 号に寄せて

熊谷 松治

昭和34年(1959)11月15日に『S H C 横浜支部NEWS』第1号が発刊されてから、今年の3月で、第500号を数えるという。それを記念して「しだ」第31号が発行されるにあたり、支部長からの要請で、過去に支部ニュース作りに携わったものの一人として、その思い出の一端をたどることにしました。

昭和31年に発足して3年目に支部ニュースの定期発行がスタートしてから、一時ハガキ判に形を変えたことはあったが、以来41年間1回の休刊もなく今日に至った。私が入会したのは、昭和48年2月で、支部長(当時は代表といっていた)は山田進さん。ニュースは第163号が配布された。その頃のニュースは、支部委員2名が2ヶ月交代で作っていました。ガリ版刷り2~4頁で、担当者の都合で手書きを青焼き(リコピーのこと、懐かしい!)にした場合もありました。

その後、支部長は鈴木国之氏、碇清人氏、と代わり、昭和53年(1978)4月より北村義さんの代になり、5月号(226号)から、私がニュースを担当することになりました。山の知識に乏しい私が作る内容は、振り返ってみても稚拙で赤面ものでした。こうして昭和62年12月、第341号まで足掛け10年、116号を作りました。

その後は短期、中期にわたって数名の方が携わり、ワープロ、手書き、混用と作り方は様々でした。こうして私は支部ニュース作りとは、縁がきたと思ったのですが、計らずも「昔の名前で出ています…」ということで、平成3年9月(386号)から平成7年4月(429号)まで3年7ヶ月の再登板。うろ覚えのワープロでボツリボツリと相つとめました。

今でも折りに触れて、古い支部ニュースや「しだ」を引っ張り出しては読み返し、時の立つのも忘れてしまうのです。

NEWS

オ 目
昭和34年11月15日 刊
S·H·C
横浜支部
編集・監修 山田進

『支部ニュース』第1号、題字の部分(1959.11月)

今 私の手元に昭和55年3月12日発行 248号から498号までの支部会報があります。前にも書きましたが私の宝物。折に触れて読み返し懐かしんでいます。

私が当時 紅葉ヶ丘青少年会館で毎月第二水曜日に開かれて居た、新ハイ横浜支部の例会に初めて出席したのは54年10月でした。すぐ入会するつもりでしたが、すぐ年度替わりだからと言われ、3月に会費千5百円を支払い会員になりました。

最初に戴いた会報はB4二つ折4ページのガリ版刷り。熊谷松治さんの労作でした。そして53年5月226号～62年12月341号まで約10年間たった一人で毎月ガリきりから印刷まで、会社勤めの合間に行きたい山も我慢して、何一つ文句も言わず黙々と作り続けてくださいました。私達は例会には必ず会報があり、それが当たり前と熊谷さんの苦労など思っても見ませんでした。

その間 昭和59年9月2日《支部会報300号記念『羊歯』発刊を祝して》と銘打って、私 星野が係となり大倉山荘の庭で盛大な祝宴を開き、楽しい1日を過ごしましたのが、つい昨日の事のように思い出されます。

その後 だんだんとワープロが普及して来て、ガリ版の用具も手に入り憎くなり、しまいにはインクも手持ちだけとか伺いました。

昭和63年1月 342号より茂木さんが初めてワープロ編集で素晴らしい会報を作成しました。しかし仕事の都合上印刷までは出来ず、原稿は私に送られ私がコピーをしてページを揃えて折り、例会に持参するという綱渡りのような事をしました。結局無理が出来、わずか5ヶ月で終了。

後引き継ぐ方を探しましたがなかなか見つからず、お節介な私が山本さんを拝み倒して、1年でよいからと6月347号からお願いしワープロ編集、コピーも会社でして下さいました。ほっとしたのもつかの間、仕事が忙しくて12月で終了。

見かねた石原さんが奥様にお願いしたのか 押し付けたのか定かではありませんが、64年(平成元年)1月～12月 354～365号まで手書き編集。コピーは石原さんが会社でして下さいました。これはご夫妻にとって大変な事だったと思います。山をやって居る者には解っても、知らない方には原稿を読んでも、まして一字違っていても解らない事ばかりだったと思います。本当にご苦労様でした。

平成2年1月366号から北村支部長が引き継ぎ、3年9月386号までワープロ編集して下さいました。

平成3年10月387号から再び熊谷支部長にバトンタッチ。その頃ワープロを習熟して居た熊谷さん 早速ワープロ編集。ガリ版とワープロとどっちが良かったか聞き漏らしてしまいました。

一度何かを頼むと後はどんなに大変と思っても、みな知らぬ顔の半兵衛を決め込むのが横浜支部の悪い癖。又々4年も会報作成をすることになりました。平成7年になり「何方が変わってほしい」と言われましたが誰も返事をしない。熊谷さんも困った様子。当時私も多少ワープロを打っていましたが、会報など出来るとは思いませんでしたが、お節介な私の事 後先考えずに引き受けてしまいました。

それからが大変、四苦八苦で5~6月号を作成したところで、入院することになり三度熊谷さんにお願いしました。

退院後 平成7年10月 435号から、何とか毎月皆さんのお手元にお届け出来ました。最初はB5用紙で10~12ページの原稿を作り1-12 2-11 3-10とゆうようにつなぎ表 裏とコピーしましたが、小さな文房具やの置き場所も無い所で間違えてばかり、泣きたい想いでした。家に帰り夜 主人に手伝って貰い、二つ折りにしページを揃えて一冊の会報にし110部作りました。

熊谷さんと飯島さんにはスケッチなど書いて戴き、表紙に使ったり、縮小して余白にいれたり、文字ばかりでないほっとするような、会報が出来たと嬉しく、改めてお二人にお礼を申し上げます。

平成8年になりそれまで長年利用してきた紅葉ヶ丘青少年会館が閉鎖となり、急速今の県民センターに会場が移り、それと共にセンター内の印刷機の使用も可能となり、石原支部長がお手伝い下さり2人で作業をしました。

それまでのコピーと違い印刷機と紙折機の早い事。今まで幾日か掛かっていたのが半日足らず。今までの苦労が嘘のようでした。文明の利器?の有り難さ。お蔭様で平成11年3月 488号まで続けさせて戴きました。

平成11年4月より 鈴木 薮崎両氏に引き継ぎ、初めは薮崎さん後に鈴木さんが担当し、12年4月489号より平野さんが引き継ぎ今日に至っています。平野さんご苦労様です。お仕事をしながらの会報作成は、大変と思いますがよろしくお願ひ致します。

聞くところによれば、熊谷さんが作成を担当する前の会報ははがきだったそうです。今ではりっぱな会報になり喜ばしい事です。先輩の方々から脈々と引き継がれてきた、会報を初め支部の良き伝統を何時迄も残して戴きたいと願っております。

山行の思い出あれこれ

石原弘之

早いもので横浜支部に入会してから約20年近くになる。初めての山行が十二岳であった。参加者は5名で当時の山行では普通である。支部員が増えるに従って参加人員も多くなり賑やかな楽しい山行が増えるようになった。しかし楽しいばかりでなく苦しかった山行なども多くあり、これら様々のこと等を思い出すまま述べてみたい。

1. 天ぶら山行

個人山行で昼食時に天ぶらなどを揚げていた経験を生かして支部入会後初めての山行を天ぶら山行とした。係として不慣れな点などを皆さんにカバーしてもらい無事に終了することが出来た。沢でカニなどを獲り天ぶらに揚げたり、山菜などもおいしく食べることが出来たりして忘れることが出来ない。その後も4月下旬に山行を計画し雨以外には毎年続けてきたが、参加者の皆さんとの協力と更に数多くのサブの女性陣のおかげと感謝に絶えない。横浜市の広報誌に横浜支部の紹介記で御前山の天ぶら山行の写真が掲載されたのも忘れられない思い出である。

2. 雨の山行

日本のマッターホルンと云われる大原太山に登る。湯沢温泉に一泊し頂上を目指したが曇っていたが曇っていた空が急に黒雲に変わり大粒の雨となり、どしゃ降りである。頂上につくが休まずに下山、直下の岩が逆層になっていて足場がなくすべり下りる。蓬崎まで笹の生い茂る細い道を唯ひたすら歩く。雨具をつけていても役に立たない程だ。勿論、靴のなかも水びたしになった。前日の宿で風呂に入ることが出来て生きかえった気持ちになる。苦しかった山行も忘れて無事帰途についた。又白毛門から清水峠を経て清水部落までの縦走も途中から雨に降られた。更に悪いことに清水峠からの下山路が雪渓に覆われ道がなくなっている。手さぐり、足さぐりでどうにか車道に出た。うれしいことに車道に宿のマイクロバスが迎えてきていた。つかれた足が急に元気になって車に乗り込んだ。

3. 一番多く登った山

檜洞丸は支部入会以前に何回か登っていたので、入会後、係として毎年の様に西丹沢の山開きに合わせて山行を計画した。頂上で12:30から神事が行われるのでその時間までに登る。神事が終わると記念のバッジが配られる。無料で白樺で作られた素朴なものであったが金属製に変わり、そして有料になった。最近はこの神事が頂上から登山口に変わった。檜洞丸は頂上付近の白八汐つじがあまりにも有名だがその開花は天候などによって異なるので山開きに満開の花を見ることは少ない。運よくその開花に合うと山一面の満開飾になる。毎年登っていてもやはり新しい感動を覚える。これからも出来るかぎり登り続けたいものだ。

4. 歩程が一番長かった山行

長い歩程に大菩薩峠から滝子山までの縦走がある。最初の計画では柳沢峠から嶺を経て介山荘に泊まり小金沢連嶺を湯の沢峠から下山する予定であった。湯の沢峠まで歩いても全員すこぶる元気。

時間的に余裕もあったので歩こうと云うことになった。大倉高丸、大谷ケ丸を経て滝子山まで歩く。やはり長い。それでも頂上につくと元気が出た。滝子駅まで一気に下る。駅前酒屋で買ったビールのうまさが今でも忘れられない。歩程は約12時間前後だったと思う。

5. その他いろいろ

鳥海山の七号目付近の御浜小屋で一休みし頂上を目指したが尾根に吹く風が強くて危険と判断した係の指示で登頂を断念した。その時の風の強さは今にも吹き飛ばされそうになるほどで今も忘れない。その他9月に丹沢で初雪に降られ喜んではね廻ったり、お汁粉を用意したが参加者が男性ばかりで食べきれず通る人々に無理に食べてもらったりした事もあった。思い出は書きだすと数かぎりないが、最後に昨年9月、おはら風の盆山行でリーダーの平野さんの実家に泊めていただいた時、平野さんのお母さんに大変ご迷惑をおかけしたにもかかわらずニコニコ顔で参加者と同じテーブルの輪のなかで食事をされている姿を今でも忘れることが出来ない。心からお礼を申し上げたい。

以上



支部旗万里の長城へ 北京郊外八達嶺（バーターリン）にて

平成12年6月12日

冬の上高地

齊藤 郁夫

このタイトルから高度な内容のものを連想されたのであれば、この文章はまったくかけ離れたものであることを、最初にお断りしておきたい。

今でも冬の上高地と聞くとかなりの「山屋」にしか立ち入ることが許されない聖域というイメージがあると思われているが、昨年還暦を迎えた私のような弱者でも 15 年くらい前から割と容易に入れるようになってきている。

ただし以下は正月休みに限っての記述であることをお断りしておく。

私と冬の上高地との出会いは約 20 年前の 3 月下旬山用品店主催の「スノートレッキング」にカメラ友達と二人で参加したことから始まる。この時は沢渡までタクシーで入り、雪道を中の湯まで歩き、翌日釜トンネルを抜け出口からの雪崩の名所といわれていた難所をピクピクしながら通り過ぎ、快晴の空の下を膝近くまでの雪道を総勢 30 名近くでバス道に残された踏み跡を辿り大正池を前にして眺めた荘厳な穂高連峰には皆歎声をあげた。勿論大正池ホテルも含めて他の旅館も全て休業中であり、そのままバス道を河童橋まで進み、橋の上で穂高を眺めつつ優雅な、加えて私達だけの貸切りのコーヒータイムと洒落ることもできたほどに、他に人影を見ることはなかった。

この後参加者は付近周遊、明神往復、徳沢往復の 3 組に分けたので、私は徳沢を選択し、10 人ほどでかすかな踏み跡をはずと腿まで潜る深雪を掻き分けながら辿り着いた徳沢園の越冬管理人の歓迎はその疲れを吹き飛ばしてくれた。

大休止の後明神池を見て往路を河童橋へ着く頃にはさすがの好天もそろそろ陰りをみせ、穂高岳をはじめとした絶景も雲に隠れ出したが、この時の上高地の静かな佇まいとその景観の素晴らしいしさは、私をその後毎年のように正月休みに通い続けさせるほどに魅力が溢れるものであった。

当初は偶然にも大正池ホテルが年末年始のみ営業しているとの情報を入手したことからで、新穂高温泉からロープウェイを利用して西穂小屋へ泊まり、上高地へ下山するコースを手始めに実施した。この時は余り好天には恵まれなかつたが、それでも独標を往復することが出来たのでそれなりに満足できた。

その後は坂巻温泉までタクシーを利用することも出来るようになり、釜トンネル出口付近の道路工事も進捗し、併せて雪崩の危険も避けられることとなったので、その年によっては徳沢まで入って翌日は横尾経由で蝶ヶ岳頂上の手前までのピストンを 2 年連続したり、また徳本峠小屋で宿泊したりとバリエーションをつけながらも殆どの正月休みには上高地の冬を楽しんできた。

なかでも印象に残っているのは、新年を再建直後の西穂小屋で迎えるべく新穂高からの 2 度目の上高地へと辿った際のことで、大晦日に西穂小屋へ入り、初日の出を小屋前で迎え、珍しいくらいの快晴無風の好天を利用して、独標での大展望を楽しめたことである。この時はまれに見る好天であり独標で素手でフィルム交換が出来たほどで、前回の寒さと曇天に比べたらウソのように快適であった。

午後も好天が続き上高地へと実に楽しみながら下山することが出来たし、その夜の大正池ホテルでのビールが格別美味だった事も含めて最高の思い出となつた。

ここ5年くらいは、体力と気力の衰えもあって釜トンネルから大正池ホテルまで歩き、そこに2~3泊して明神池までを往復するのが限界となり、実に怠惰な状態ではあるが、それなりに冬の上高地を楽しんで来ている。

特に3年前から新安房トンネルが開通してからは、松本~高山間のバスが通年走行しているので、まさに釜トンネル入口まで簡単にアプローチ出来ることとなり、以前の坂巻温泉から歩いていた時と比べると、かなりの時間短縮となったのはありがたいことである。

昨年の正月にはカミサンとその友人2人のオバサマ3人を引き連れて2日の朝横浜を出て松本から釜トンネル入口までタクシーを飛ばし、約1.5時間かけて大正池ホテルには15時頃着いた。

この3人は特に山に慣れている訳でもなく、年に2~3回の私と登り2時間程度とした低山を歩いている程度のビギナーばかりである。

日頃の雑談の中で冬の上高地へ行きたいとの話となり、私も立場上困ったが自分の荷物は自分の責任で背負うことを条件とし、中にはゴム長で入山した者もあり、服装も昔のまたは娘さんのスキーウエアで賄った程であった。

初日は何とか穂高が見られたが、2日目は猛吹雪となり最終日の1月4日は日の出時の赤く染まって行く穂高は見ることが出来なかつたが、朝食後は見事に晴上がり歓声をあげながら、カメラを持って田代池経由で河童橋まで足を伸ばして十分に満足して下山した。特に昨年は雪が少なく入山時釜トンネルの中は水が流れおり凍結箇所も殆ど無く、出口からバス道のアスファルトが露出していたような状況であったが、帰りは適当に雪が降り積もりトンネル内も危険な箇所も無く無事帰ることが出来た。

今年は年金族となったので3日の朝から出発し、3泊し6日の午前に下山してきた。オバサマ方は都合で同行はせず、いつもの写友の2人連れて釜トンネル入口から宿舎まで1時間で入れた。途中雪のため写真をとることも出来ずひたすら歩くだけであったが2人ともまだ若いなと自己満足が出来た次第であった。ただトンネルの中は凍結箇所が例年より多く照明が昔に比べれば増設されたといえ、まだ十分ではなく、特に出口手前では過去には無かったような長さ1mを超えるような見事なツララが下がっており目を楽しませてくれた。

滞在中は連日悪天候が続いたので殆ど写真も撮れなかつたが、最終日には少し回復し青空が部分的には出たものの、穂高の全容は最後まで姿を見せる事がなかつたのは残念であった。

また大正池の水面が土砂の流入で相当狭くなつておりガッカリさせられたが、宿の支配人の話ではこの池の水利権は東京電力が所有しており、昨年渡渉を実施しなかつたためとのことであった。

池に写る穂高の水鏡が魅力の一つなのであるから今年は何とか実施して欲しいものである。まさか天下の東京電力の経費節減の一環とは考えたくないが、大正池ホテルから上流には殆ど水面が無く、枯れ木が土砂の中に立っているのはなんとも寂風景なものとなっていたからだ。

ただ今年の良い点は雪が多かったことと、ピーク時をはずして滞在したので実際に静かな上高地を味わえたことであり、残念だったのは連日風が強かつたためか期

待していた「霧氷」を見ることが出来なかつたことであつた。私は手をここ
離さず、朝日が昇るのを見守りながら、朝日が昇る瞬間アッキモーニングを逃
私としては今後も足腰が十分に動く限りこのような上高地行きを続ける予定で
はあるが、体力が許せば徳沢にも入って見たいし、徳本峠の小屋に泊まって朝日
に輝く白銀の穂高を眺めて見たいとも思つてゐる。
また正月以外の上高地にも入ってみたいとも考えている。中の湯に宿泊して翌日
河童橋までのピストンを募集しているツアーガーがあるようではあるが…

ただ上高地に気がかりな現象が生じて來てゐる。それは確実に年々積雪量が少な
くなつてきていることと温暖化も進んでゐると思われることだ。
これは体感では無く、昔の写真と比べれば明確なことであり、以前は大正池の水
面が殆ど凍結しており、早朝の撮影で赤く染まる穂高と水面に写る穂高を同時に
撮影することがマレにしか出来なかつたが最近はその機会が増えてきている。
雪の量も確実に減少してきており、10 年位前には林間遊歩道もサブルートに入
ると膝上までは雪があり、平坦なコースとはいへ、ラッセルの真似事が楽しめ、
木橋もスッポリと雪に埋もれており、歩き辛かったのだが、近年は膝下程度で前
には隠れていた木橋もその姿が現れていることが多く見受けられるようになつ
てきている。

このような現象は上高地のみならず地球全体のことなのであらうが、将来の事を
考えると暗澹たる思いになるのは私だけでは無いと信じてはいるが…

冬の上高地の魅力を、この私の駄文で表現するには到底無理なことなので、とにかく 1 度は体験されて見ることを強く勧める次第です。
少しでも興味を持たれた方に何がしかの参考になればと思って、入山に際しての
注意事項などを、今までの経験から書出して見たのでお役に立てれば幸いです。

1. 宿 舎：年末年始の上高地では、下記が宿泊可能ですが全て要予約

大正池ホテル (通常の営業時と同じ設備で稼動)

嘉門爺小屋

徳本峠小屋

徳沢園 (夏の従業員宿舎を利用)

何れも 11 月中旬には閉鎖・下山しますので、連絡先の電話番号
なども夏期とは異なります。 11 月初めまでの時点で仮予約を行
い、冬期の連絡先などを確認しておく事をお奨めします。

2. 装 備：皮製またはプラスチック製の登山靴

あるいは膝下を絞れる釣り用のゴム長靴

軽アイゼン、ストック、長スパッツ、灯具

その他帽子、手袋などスキーの時の防寒具は必要

稜線に出ないのであれば、ワカン、ピッケル、アイゼンは不要

3. 食 事：朝と夜は宿舎で可、昼は大正池の食堂が営業、嘉門爺は？

他の宿舎は予約時に要確認

以上

続：私の山旅ファイル

九州の名山を歩く

茂木 武

開聞岳 16日の朝、山川駅へ下りると「本州最南端の有人駅」と書いたユーモラスな看板が目につく。薩摩半島の最南端にあって、端正な円錐形を見せていく開聞岳は薩摩富士と呼ばれ人々に親しまれてきた。深田久弥の「海拔ゼロ米から」も現在は車道ができ登山口の2合目までタクシーを利用する。

途中から雨になり雨具を出す。「初日から雨とは逆に幸先が良いです。明日から毎日晴天ですよ」私が言った事が実は本当に当たってしまった。幸運だった。道は螺旋状になっていて、西側に出たところ急に風が強くなった。灌木帯を抜け岩が堆積した道に変わる。岩の斜面を登り山頂に着く。先ず奥宮に拝し無事の登頂を感謝する。残念だが期待の展望はなく下山にかかった。この日、霧島には予定通りに着き、夕刻霧島神宮に詣で、登山口温泉に泊まる。

霧島山 17日早朝、えびの高原はまだ夜が明けたばかり。朝日が周囲の景色を茜色から豊かな色彩に変えてゆく。韓国岳は霧島連峰の最高峰だが登山道は易しい。硫黄の匂いがする。硫黄岳の噴煙を横目に見て登って行く。

ミヤマキリシマが鮮やかに蕾をつけている。ミツバツツジも見事。8合目から火口縁を行くようになる。韓国岳に着く。山頂には先客がいた。写真撮り合い交替する。しばし展望を楽しむ。霧島の山々は勿論だが、南に桜島のボリュームのある山容も見渡せた。

高千穂峰 高千穂河原は家族連れのハイカーが目立つ。世間の人が動き出す頃こちらはすでに一山終わっている。最初は霧島古宮跡の右から遊歩道を登る。溶岩の急峻な道だが爽快で楽しい。山頂には岩塊の上に「天の逆鉾」が立ち2等三角点の標石。北には今朝とは逆に新燃岳、韓国岳と見渡せた。この日は霧島—西鹿児島—熊本を経て阿蘇線宮地の民宿に泊まる。

阿蘇山 18日も晴天で明けた。仙酔峠から左へ花酔橋を渡ると仙酔尾根コースに入る。麓付近はミヤマキリシマのピンク色が広がる。高度があがると本格的な岩場が現れ、アルペンムードを満喫する。高岳火口壁に出た。ザックを置いて散策する。火口の中を覗くと凄絶な風景がそこにある。高岳、中岳と砂礫の道を歩き展望台を経て、観光客で賑わってきた仙酔峠へぐだった。予約のタクシーはすでに待っており、すぐ牧ノ戸峠にむかった。

九重山 やまなみハイウェイが開通し、九重登山の主流は長者原から牧ノ戸峠に移ったという。その牧ノ戸峠の売店で弁当や水などを買い出発する。九重連山

は坊がつるを囲む山々からなり、その代表格は久住山、大船山、三俣山。売店の側が登山口である。沓掛山まではコンクリートの道が急登できつい。稜線に出ると爽快なハイキングとなった。三俣山が前面に見えている。久住別れから久住山中岳、天狗ヶ城と山頂を踏み、久住別れに戻る。ここに立ち入り禁止の大きな看板とロープが張ってある。それをくぐって大石の道をくだる。北千里浜の名の様に、谷道は平な砂地で大きなケルンが、ほぼ直線に続いている。右折してすがもり越えから急下降が始まると、間もなく法華院温泉山荘の赤い屋根が見えてきた。

大船山 前夜は山荘の夕食を全員大盛りで食べた。朝食が7時からというのは思わぬ誤算。そこで大船山からの帰路を牧ノ戸峠でなく、坊がつる—雨ヶ池越—長者原にコース変更。迎えのタクシーにも連絡を済ます。

19日朝は、この山行で初めて法華院山荘で普通に朝食をとって出発する。右折して大船山登山口の表示。アセビの樹の間の急坂を行く。道々イワカガミの群落に目を見張る。段原から右折、火口縁で瘦尾根の道を僅かで大船山に着いた。山頂の展望は素晴らしいの一言に尽きる。平治岳、三俣山など九重連山はもとより、阿蘇山や鋭い稜線の根子岳もくっきり雄姿を見せていた。

祖母山 朝早い時は朝食の代わりにおにぎりと、大抵決まっているが飽きた。現状を変えたい。そこで前夜旅館の奥さんに、朝3時頃に朝食を食べられるか聞いたら「いいですよ」の返事にこっちがビックリする。九州は関東より日の出が1時間遅い。20日朝、灯具頼りに4時半に出発する。渓谷沿いに進み吊り橋を渡る。山道から沢の徒渉へて、又山道を登り平坦な林道に出た。なにか丹沢でも歩いている錯覚をする。また沢の徒渉がある。以前きた時は靴を濡らした覚えがあったが、今度は立派な丸太橋に変わっていた。周囲はすっかり明るくなった。宮原に着く。途中岩場の道から山頂付近に濃い霧がかかって見えた。

9合目小屋は新築したばかりで木の匂いがした。ついに祖母山に立った。山頂には1等三角点標石、石祠、方位盤があったが展望は望めなかった。霧と風も強まっているので天狗コースはやめ、今朝きた道に戻ることにした。最後も内容の濃い登山であったが、無事に九州山行を終り、皆さん満足感に満ちていた。

(平9年5月歩く)

浅間隠山

天候はいまいちだったが、念願の浅間隠山の登頂を果たすことができた。ハイカーも多く人気の山なんだなと実感する。カヤトの広い山頂には三角点、石の祠、立派な標識があり、晴天だったら浅間山を前に、360度の展望が楽しめたはずだったが、生憎すべては白い霧の中だった。正面を見ていると霧がはがれ、浅

闇が黒々した姿を一瞬現した。がすぐ隠れてしまった。そこここで歎声とため息が交差した。

帰路は途中で直接北軽井沢への道を探ったが、ヤブが深くて諦め二度上峰を経由で北軽井沢めざすことになった。車道を敬遠し近道をくだると、足元には薄緑色のフキノトウが群生したいた。

(平10年4月歩く)

大霧山—蓑山

経塚から稜線に向かう。旧定峰峠からはお馴染みの七峰コースを行く。大霧山頂は登山者で賑わっていた。ここで早い昼食にする。晴天なら両神山、奥秩父、浅間山など好展望なのだがガスっていて残念。近くの蓑山、笠山は視界に入る。見事なヤマボウシの白い花を眺めながら、大霧山をくだる。粥仁田峠の手前で秩父へ通じる道へ。倒木で各自ほふく前進の場面もあったが、後の道は良かった。

広町の十字路から二十三夜寺へ。ここは秩父十三仏の一つ、この地方では「お十夜さん」と呼んでいる。関東ふれあいの道の道標は「美の山公園」を指している。途中はかなりの急登があり山頂に着く。茶店は閉まっていた。自動販売機で各自飲物を飲み休憩する。ここでも展望は望めず、帰路は少し頂稜部を歩き、蓑神社を経て皆野にくだった。幸運にも間一髪、皆野駅で池袋行き直通電車に乗ることができた。

(平10年6月歩く)

美ヶ原

・ 登りつめて不意にひらけた眼前の風景が

しばらくは世界の天井が抜けたかと思う。

美ヶ原のシンボル「美しの塔」には尾崎喜八の表記の詩碑がはめ込まれていた。標高二千米に広がる美ヶ原は、高原の名前そのものといえる。王ヶ頭の頂上に立つと、西から東へ常念、穂高、霞沢、乗鞍、御嶽、中央アルプス、南アルプス、八ヶ岳と続き、東の正面には浅間山。まさに夢のような展望が広がっていた。

鮮やかな朱色に近いレンゲツツジが、今を盛りと咲き乱れる丘陵地帯。ゆっくり逍遙するには、あまりにも時間が足りない。皆さん銘々に山座同定など楽しみ、高山植物を愛で、山本小屋のソフトアイスを食べたりして、高原でのひとときを過ごした。最後は西端の王ヶ頭へ登り、天狗の露地をへてバス停にくだった。

(平10年6月歩く)

白谷沢—棒ノ嶺

11月16日朝、西武池袋に7名が集合する。飯能からはタクシーで有間ダムから更に奥へ、白谷沢登山口まで入る。もうこの付近は多くの登山者で賑わっていた。全員で任意に柔軟体操をやってから出発する。このところ町も山も雨なし

記録が更新され渴ききっていた。昨日やっと広範囲に恵みの雨があった。登山道は適度に湿って瀬音も心地よく、紅葉が一段と映えている。

前方に「藤懸ノ滝」が見えてきた。休憩。滝上で右岸に渡りそのまま行く。水量はあまりなく、靴が少し濡れる程度。「天狗ノ滝」からは岩は廊下状に狭まってきた。右側の石垣をゆく。彩り見事な紅葉の中に「白孔雀ノ滝」が見えた。ここで鎖をつかんで滝上に出る。これで白谷沢の核心部は終了である。岩茸石の直下で休憩し、岩茸石では写真だけで出発する。

権次入峠に着く。下を覗くと今朝登ってきた名栗湖が見えていた。出発。間もなく棒ノ嶺に着く。古い地図だと山名は棒ノ折山で（棒ノ嶺）とカッコがつくが、最新の地図ではこの扱いが逆転して、棒ノ嶺（棒ノ折山）と変わっている。帰路は南へ奥茶屋めざしくだる。後方からNさんの歌声が聞こえてきた。「嬉しい歌、悲しい歌、みんな聞いた中で、忘れられぬ一つの歌、それは仕事の歌……」。

ワサビ田が出てくると、林道はもう間近である。 (平9年11月歩く)

☆コース図 白谷沢登山口9:10…藤懸ノ滝上9:30-35 …天狗ノ滝9:45…白孔雀の滝上9:55-10:00岩茸石下10:25-35…岩茸石10:45 …権次入峠11:10-28…棒ノ嶺11:40-12:50 …奥茶屋14:00-20…川井駅15:40



の高

「日本アルプス」を世界に紹介した英人ウォルター・ウェストンは1891年(明治24年)7月末、檍ヶ岳へ登る為に、徳本峠を越えて、上高地へ向かった。その時彼は友人と2人で当時住んでいた横浜から汽車で8時間揺られ、横川に着いた。そこから鉄道馬車で碓井峠を越し上がり、軽井沢まで3時間かけて行った。何のことではない。信越線が長野新幹線が出来て、横川止まりになり、軽井沢まではバス運行となつたのは、所要時間こそ違うが、その時代に戻ったということだ。軽井沢は当時から外国人向きの避暑地として人気があったという。軽井沢に1泊して浅間山に登り、ようやく松本に入った。松本に泊まった一行はそこから人力車で、途中からは悪路のため、徒歩で島々近くの橋場まで行き、そこで案内人を雇い、いよいよ登り始めた。

私は彼らが19世紀末に非常に苦労して登った徳本峠への道をまさに百年経つた20世紀最後の年に、辿ろうと8月の中旬に、八王子から夜行に乗り、新島々に入った。(5時15分着)登山客は全て、上高地行きのバスを待っている。タクシー乗り場に行って、徳本峠をめざすのは、私だけだった。島々を200m入った地点までしかタクシーの乗り入れは許されていなかった。島々谷川の河原に下りて朝食にする。1台のランクルが止まっているが、人気はない。夏でも朝の空気は冷たい。静寂とそれ以上にこの峠越えのコースに誰もいないということに、感動する。二股までは川沿いの縁の山々が迫る林道歩き。砂防ダムの手前で休んでいると、単独行の人が追い抜いて行った。初めて会った人だった。その人と抜きつ抜かれつしているうちに、言葉を交わすようになった。京都の人で、徳本峠へのコースが好きで、もう9回もきているという。今日も時間が空いたので、夜行で来たとのこと。どおりでデイバッグのような軽いザックを背負って軽快に歩いて行く。

道は二股で林道を右に見送って、いよいよ山径に入る。渓谷沿いの縁が鬱蒼とした、時には苔むした桟道、そして小沢が適度に、現れて水には全く困らない。瀬戸の滝を過ぎた上部の出シノ沢の小屋でウェ斯顿等は泊まっている。そこで蚤と高齢に悩まされたと書いてある。今その小屋は無い。翌日その上流の樵夫小屋で雨宿りしたとある。これが岩魚留小屋の前身なのか。岩魚留小屋には先の京都氏がもう着いていた。そしてここに岩魚の塩焼きは最高というので、1尾800円也を早速味見した。京都氏によれば、ここに岩魚は天然物で、激流で身がしまり絶品だという。この小屋も閉まっていることが多いので、幸運だともいう。小屋番が水槽から取り出し、すぐに焼いてくれた岩魚と缶ビールは確かに最高だった。後からやってきた女性2人組も京都氏に盛んに勧められ、2人で1尾注文していた。

そこから峠への道もかなり長かったが、途中の力水(最後の水場)で元気を取り戻し、つらいジグザグの道を登りきり、やっと峠の小屋に着いた。(13時55分)

ウェ斯顿達は穂高の景観を垣間見て、上高地に下り、檍ヶ岳へ向かったのである。しかし

その時は登頂出来ず、翌年ようやくその頂きに立っている。
私は近くの展望台に行き、その雄大な景色を堪能しようと思ったが、やや雲が多く、前穂高の一部を見たに留まった。小屋は平屋に見えたが、屋根裏をいれると3階まである。それでも予想に反して満員であった。

翌朝、もう一つの目標である霞沢岳へと向かった。小屋からのコースの歴史は意外と新しく、本格的に開かれたのは昭和59年である。それ以前のコースは帝国ホテルの裏の八右衛門沢に沿って登るのが、主流であり、ウェストンは勿論、新ハイの古い号の紀行もそのルートを紹介し苦労して登っている。(298号川越はじめ氏、348号山口ゆき子氏)

そしてこの徳本峠小屋の方々の尽力で我々でも登れるようになったのである。かといって決して簡単なコースではない。往復7時間のアップダウンあり急登ありの長い長いコースである。実際後30分で山頂というK1ピークでもういいと帰った人もいた。そして昨日岩魚留小屋で一緒に岩魚を食べた女性パーティもK1ピークでいいという組だったが、頂上へ往復した人に励まされ、私もやや遅れて頂上に向かった。確かにK1ピークまで霧が降る天候で道はぬかるみ、おまけにブヨが多く安心して休めず、かなり体力を消耗していた。小屋を5時に出発して9時13分ようやく霞沢岳の頂に立った。三角点と山名の書かれた板切れのある小さな頂上だったが、満足感は大きかった。やがて女性パーティも登ってきて、お互いに登頂を喜び合った。その一人が槍や穂高よりもきついといっていたが、体力的には確かにそうだった。そしてこの山は槍や穂高を経験した人たちが多く登る山なのかもしれない。あいにく大展望は得られなかつたが、直下のお花畑に魅められ、霞沢岳をあとにした。

そしてその2週間後のハツ岳でその女性の一人と再会するとは……。

完



（伊東直子）伊東直子（伊東直子）

（伊東直子）伊東直子（伊東直子）
（伊東直子）伊東直子（伊東直子）

芦別岳（1727M）に登る

飯島 和子

大雪山系、旭岳からトラウムシ温泉まで縦走して、北海道の雄大な山に圧倒され続けた二泊三日の山旅を温泉で癒した。さて明日からの予定はと、地図を広げる。夕張山地の最高峰であって、山容の荒々しさと美しい姿の北海道のマッターホルン『芦別岳』に決めた。

温泉からトラウムシ岳をピストンした同宿の男性が自分の車で、登山口の『太陽の里ふれあいの家』まで、送ってくれとのこと。私達女二人旅、ヒッチハイクは無理かな、この際好意に甘えよう。宿にはヒグマ情報が掲示されている。登山道から200m先、300m先に表れているらしい。ヒグマの山を歩くのだから、それも仕方がない。ザックに鈴をつけて翌朝6時に出発、新道のコースに行く。キャンプ場をぬけて山道に入る。樹林の道は緩い起伏の尾根で登りやすい。時折ケモノの匂いがするのは私の鼻のせいかも。ダケカンバの中を登ってゆくと、『覚太郎コース』との分岐を右に見て、しばらくの登りで、半面山の頂となる。本谷の向こうに夫婦岩のメレンゼが望まれる。笛原のジグザグ道を登りきると、雲峰山で『頂上まで1000m』の標示板がある。芦別岳が天に向かって、つき上げ烏帽子のごとく。少し下っていよいよ急斜面の登りになる。右側は険しい岩稜とルンゼなので注意が必要な所だ。岩稜で切り立った芦別岳頂上に着いた。せまい頂上は東西が岩壁となって切れ落ち、高度感があって、眺めも抜群である。富良野盆地を挟んで、大雪、十勝連峰、北日高、札幌の山々、暑寒別まで望むことが出来た。私達の他に後から登って来た男性一人に記念写真のシャッターを押してもらった。一言も口をきかないめずらしいひとだった。頂上で旧道方向を見ると、さすが岩がそり立っていて、この山の魅力を充分に誇示しているようだ。大満足して、同じ道を下山する。体力を消耗しての足元を注意するが、何と楽なのか。タクシーを予約してあるので、楽しみながらのんびり下る。

往復8時間の山旅は、又一つ終わった。明日からの十勝連峰縦走への宿、凌雲閣へと移動した。

平成8年9月歩く



草野心平記念文学館から二ツ前山方面

熊谷 松治

川 柳

長谷川 美江

啄木鳥の音も穏やか春の山

国境谷間に架かる昼の虹

雨上り刈草の香地を這つて

盂蘭盆会緑濃き中秋の花

法師蟬鎌倉古道曼珠沙華

急傾斜祭唯子か里近し

紅葉燃ゆ貧しき者にも平等に

古都の秋名残の紅葉散り惜み

古都晚秋漸んだ池に白鷺の

木枯らしや友住みし街落葉舞う

古傷や難所通過でまた疼く

湯船にて疲労始めて口に出し

喋り過ぎ一人になつてなお孤独

天神も修学旅行は手に余り

香港に生きる

古谷 芳子

輝かに 21世紀迎えたり夫(つま)に併い香港に生く

60才の定年迎えし夫はいま再就職を香港に就く

香港の駐在再び迎えんか孜々たりし夫に吾は在り願る

渺渺と黒き富士の真明かに機窓より吾が視野に在り

香港に吾れ生れしかと思おへり混沌たりしがこよなく恋ほし

風きりて行き交う車のハイガスにめげず咲きいるアーケンヒーリア

朝の海白き波の筋曳きてフェリーのラッシュは輝かにして

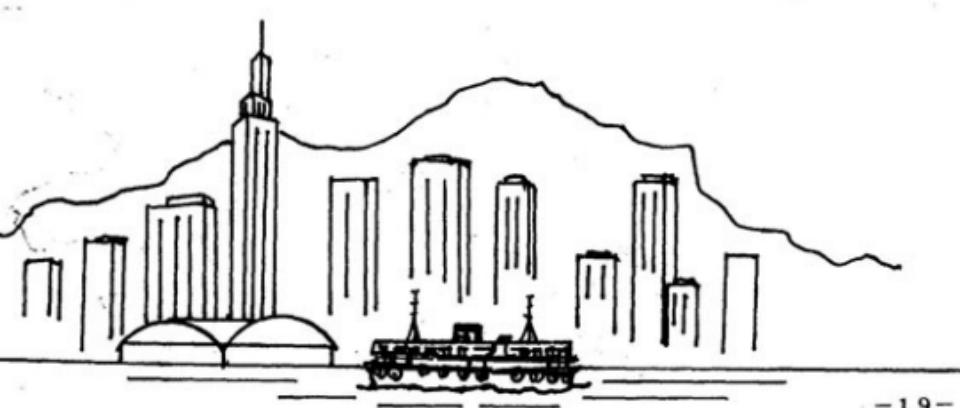
天籟ろう九龍サイドに行く船のかそかなりけり黄昏の海

泊つ船の限りなきかな夜の海巻き見ゆるピクトリアハーバー

ゾウサンの言葉交して朝食の粥食す音の店内賑わし

油菜と水餃、炒麵、炒飯と視線浴み食す日本人吾れ

あえかなるパウダーパフの紅の色驟雨に打れ停く萎えぬ



燃さかる炎のさまを思いつ火炎木の花うつし身を焼く
(ウオネイチキンキ・ヤツブ')

己がじしストレス解消うち振うそぞろ行きたり黄泥湧峠

眼下のピクトリア湾に霧たちて湾仔、中環なべて鎮さる
(タイハントウ)

大坑道の傍へに居並ぶ線香の悼み思おゆ戦争の跡

妖精の現れ出んか天霧ろうフローバーコープ湖を眼下に見つ
(アバティーン)

香港仔の海を見おろすなだりゆく海に呑まるる如く思えり

香港とは思はざるかな山道に時の間癒さるバターカップオキット'

霧こむる山路歩めば野犬にも怖じいたり此処は香港

(チンシャン)

(チョンムン)

幾度か夫と登りし青山に振り返り見る屯門の街

茫茫と展けゆく海見放くれば登る如に変わる屯門の海

鉄線の張りめぐらさるさまを見きキャスルピークはなべて変わらず

眼前のピクトリア湾の向う山大帽山に夕日おぎろなし



王美喜 楊

（アーチー・ワウ）

（アーチー）樹木軍の傷跡と思えり防空壕大帽山の山頂に見る
る（ヤウ・ヤウ・シャン）

（アーチー）萬鷗山のかやとのピースに身を委ね寂寥の時轟々攻まり來
たり

（アーチー）萬鷗山の山容際立つ稜線の広漠たりし山並みひたぶる
食合（アトウ）

（アーチー）南丫島の菱角山頂極むれば穏しき海に眇たる島みき
の眺（タカシマ）

（アーチー）香港の山々見放けり南丫島の菱角山にさまよいにけり
（アーチー）

（アーチー）偶さかに神風洞とう洞穴に日本人吾れ足とどめ執す
る（アトウ）

（アーチー）山降りてけだるきままにピケニツクハイの海鮮料理食みて和しむ

（アーチー）灌木と岩に阻まれいくそたび海おぎろなステンハウス山
（チエンチャオトウ）

（アーチー）快速船に波の潮沫身に受けて長州島に夫と渡り来
（アーチー）

（アーチー）軒先にパラソルの花咲き盛る海鮮料理の猶樂しかり

（アーチー）山寺を見下ろし登る山中の觀音山の稜線を行く
（アーチー）

（アーチー）寶蓮寺の喧噪断ちて急峻の鳳凰山に蹠蹠と行つ
（アーチー）



前回平成8年 羊齒第30号に“山行の想い出”と題して種々書き連ねました。

以前から私は65歳で山行係やその他もろもろに終止符を打ち、人様のお尻についてのんびりと山歩きを楽しむつもりでした。それまでは月1回の山行その他、出来る限り支部のお役に立ちたいと願って居ました。それは長い間お世話になった支部への御恩返しと思って居たからです。

それが平成7年夏 思いもよらず胃ガンの宣告を受け、胃の4分の3を切除し、もう山は諦めるしかないと落ち込みました。その後支部の皆様のお陰で12月2日今倉山～菜畠山行で復帰、平成8年11月釧路ヶ岳～黒岳山行で、昭和58年5月両神山～八丁峠山行から続けてきた支部山行係を無事終わらせて戴きました。最初から身の程知らずな山行計画に、ベテランの方々が何も言わずに、黙って後ろを固めてくださいました。それだからこそ私ごときにも山行係が勤まったのだと、有り難く感謝致しております。

そんな時の『羊齒』発行でしたので、横浜支部に入会し先輩にいろいろ教えて戴きザックを持って戴くなどお世話になりながら、登り続けた20年近い山行のあれこれと思い、もう二度と再び登る事の出来ない山々を愛惜込めて書いたのでした。.

思えば私は何時も勝手な理想論ばかり、2年努めた副支部長を止めるとき曰く「老兵の身を晒したくない」曰く「老兵は死なずただ消え去るのみ」当時の私は自分の引き際を余力のあるうち、人に惜しまれる内に、と考えて居ましたのでほっとしました。ただし支部会報作成だけは、後を引き受けてくださる方が居ませんでしたので一昨年3月まで続けました。

以後 気ままに支部、個人、本部や平日グループに参加して居ましたが、何故か本部山行のサブになりリーダーになり、平ゲルのリーダーになってしましました。

“なんで私が”とお断りしても後の祭り。今は覚悟を決めて70まで何とか頑張ろうと思って居ます。

それもこれも、横浜支部あっての今の私が有る。すなわち私の山登りの原点ですから・・・ 今は何かと忙しく、支部山行は年数回の参加ですが、なぜか支部山行は気心した皆さんとのおしゃべりに心が安らぎ、とても幸せな気分になれるのです。

それは肩肘はらず有りのままの自分で居られるからと思います。

近いうちに又、以前の様に毎回（その頃には歩けないかも？）お邪魔虫で参加させて戴くつもりでいます。その時にはどうぞよろしくお願ひ致します。

横浜支部創立50周年まで生きて居るかな？ “憎まれっ子世にはばかる”

「ばけもの」と呼ばれて

木滑清一

平成12年5月12日水交梓会の山行で滝子山に登った。この会は日本海軍関係者の山の会である。私は第2陸軍造兵廠（板橋）に動員されたり、その後委託学生となり、第3陸軍航空技術研究所（立川の陸軍航空施設跡地は現昭和記念公園）で訓練を受けたりしたが、海軍には直接関係がなかった。それなのに、私は縁あって水交梓会に入会した。戦後半世紀余、戦前のことは忘れ去られ、軍の話は嫌われる位が闇の山であるが、話の筋をご理解願うため、先ず海軍について若干触れたい。

海軍は、明治初期の創設以来、海軍兵学校（広島・江田島）で兵科現役士官を養成した。兵学校は旧制中学4年修了で受験できた。試験はかなり難しく、私の中学のトップも兵学校に入った。視力等身体的理由で海軍機関学校（京都・舞鶴）に回された者、および海軍経理学校（東京・築地）に入った者もいるが、何れも採用数が少なく、ためにOB数も兵学校が圧倒的に多い。従って、水交梓会々員も兵学校OBが断然多い。昭和20年の終戦時、兵74期は少尉任官1ヶ月を経たばかり、兵75期が1号生徒で最上級生、兵78期が4号生徒で最下級生、特に兵78期は入校後3ヶ月半を経たばかりであった。当時、採用数増加、兵学校と機関学校の統合等諸般の事情で一部は江田島以外の岩国等で教育を受けた。思えば、学徒動員で文科系学生が速成予備士官となり、急遽一線に赴いたのもこの頃であった。

平成12年末現在、水交梓会々員は兵72期～78期が主である。これに横須賀等鎮守府在籍者、その他関係者が加わって構成されている。その他関係者に会員夫人、防衛庁在籍者OB、会員紹介者等が入り226名（m178、f48）、意外と変化に富んでいる。水交梓会の山行は年間約20回、係りは兵各期等が分担する。月約2回弱の山行は、年齢等を考えれば相当であろう。一番若い兵78期が昭和4年生まれで、70歳となつた。他は推して知るべしだが、年齢不相応に皆若くて元気がよい。当座は現状で充分に間に合うが、将来に亘り会が存続するには、後継者が要る。有力後継者と目されるのが防衛大学校（防大）出身の海上自衛官である。ところが、海自防大卒者数が陸・空自に比し少ないためか、その数が中々増えない。彼等は担当山行の係りは立派にこなし、後継問題もよく理解し、「我々が受け継ぐ」と、誠に頼もしい。

冒頭に述べた「滝子山」山行の係りは、防大3期であった。Aリーダー、IとKの2名のサブリーダーである。笛子駅前広場でAリーダーによる点呼、コース説明、会長挨拶などがあり、23名が隊列を組み、先頭Aリーダーと殿Iサブリーダーが夫々軍艦旗をかかげて進む。約1時間の林道歩きの後に登山道に入る。木漏れ日に映える渓流沿いの道を轟登する。サレた急斜面で道幅が靴幅程の所をトラバースしたりして、危険箇所を通過し、やや緩斜面になったところで休憩となった。私は列の中ほどにいた。その時、Iサブリーダーが殿から前

方に移動するべく、私の前を通過しようとした。そこで、

「こんちわ、しばらく」と私は声を掛けた。久しく彼には会っておらず、当日、その時までに、私は彼と挨拶を交わす機会がなかったからである。ところが、

「アッ、ばけもの……」と叫んで通り過ぎてしまった。鈍感な私は、これが何を意味するのか咄嗟に理解できず、ポカンとしていた。

やゝ健脚向きの滝子山に私がいるのを目の当たりにしてびっくりし、驚きの声を上げたまま、返すべき挨拶の言葉を失ったのかもしれない。俗に男は防大、女は宝塚と聞いていたが、防大で規律と躰の教育を受け、現役時代潜水艦幹部として乗員を指導した彼にして、返礼を忘れる筈はない。驚きの余り言葉が出なかつたのが真相であろう。それにしても、彼等は私を化け物扱いしているのは確からしい。さもなければ、かかる言葉は反射的に出てこない。

一方、本年 10 月 15 日、母校同窓会の 80 年記念祭が山形で行われた。前日、同期クラス会を蔵王温泉で開いた。生存者 55 名中出席者 15 名、殆どが体不調を訴えている。欠席者も病欠が大部分である。このような実態に接し、私が彼等に混じつて山に登るなど論外で、化け物扱いされたのも至極当然であったと、思い知らされた。

これより先、クラス会出席者が少ないので、出席可能性あるケスマート Y.T を勧誘するよう幹事に云われ、Y.T に電話したところ、「記念祭に出るが、都合あってクラス会は出ない」とのこと。Y.T は昔から女性にもて、「好きな人が青根温泉にいる、是非会いに行きたい」というので、私が宝沢から北蔵王・自然園近くまで道案内したことがある。その後、東京鬼子母神の彼の自宅を訪ねた時は、置屋の娘に恋をしていた。その娘を私に会わせるとて銀座まで同行したが、擦れ違いに終わった。その Y.T が記念祭に現れた。しかも女性同伴である。奥さんですかと聞いたら違うという。前夜は天童泊り、当夜は蔵王温泉泊りだという。これが前日の蔵王温泉のクラス会を欠席した都合であった。Y.T こそまさしく化け物であると言つて差し支えない。

今年の夏富士山に登った 70 歳以上の高齢者は 700 余人、水交締会の川浦国平先輩(89)は今夏富士登山者高齢順 16 番目であった。今後も挑戦するという。上には上がいる。私はこの先輩に是非あやかりたい。しかし、先日ある先輩から、「どこも身体が悪くないのが恥ずかしいと日頃言っていた友達が、奥さんが亡くなつて 1 年もしない内に逝つてしまつた」と聞かされた。私の友人にも、この 9 月下旬横須賀の会で元気一杯に話し合つたばかりなのに、最近突然の訃報に接した人がいる。人生一寸先は闇、加えて山には危険が満ちている。だから、私は、「ばけもの」と呼ばれた客観的背景をよく肝に銘じ、慎重を期し、会や皆様に夢にも迷惑などかけることがあってはならないと自戒をしている次第である。

山に花~登旅記

渡部 詔子

1月… 阪神大震災以前の旅だが、越前岬と淡路島の三大水仙の里に言った事があります。もう一ヶ所は伊豆の爪木崎かと思っていたら、千葉の鋸南町も水仙で売出しています。群落地は正月の出荷に合わせているので、12月でも開花しています。野生の水仙を捜してたら海岸の崖際で、強風に耐えて健気に咲いていました。

2月… 有名な梅林の花期は3月が適期かなと思いますが、2/11頃、梅干し用の白梅が見頃になる曾我の梅林には良く出掛けます。水仙も梅の花も、香が上品なのが良いですね。

3月… 節分草と福寿草に会いたい季節です。秩父だと3月中旬に、両方咲いている花に会えるだろうか。関西方面だと節分草が終わって福寿草が咲きます。下旬から4月初旬が良いと思う。大糸線の姫川の源流だと福寿草の群落は4月下旬でも見ることが出来た。3月下旬だとカタクリの花も低地で咲きますよね。

4月… カタクリの花は神奈川だと城山の小林家の花が有名。有料です。桜が咲き始めの頃が適期だと思う。柏木と秩父の山麓で、咲いている所も多いですね。私は新潟の里山に通っています。カタクリだけでなく、早春の花木の花達、スミレ、エイレン草、キクザキイチゲ、ショウジョウバカマ、等々、早春の花が、いっせいに咲いて素晴らしい！

5月… 新緑とツツジのはなやかな山登りに行きたい季節です。昨年のSHC「せせらぎ」欄を読むと、5月連休に、上野原町、坪山のヒカゲツツジを見に登山している人が多く、バスが大増発されたらしいので、平日に行かねばと思っています。

ツツジ以外だと丹沢でイワザクラの群落に会えたので、箱根と秩父のイワザクラも見に行きたいです。

6月… 梅雨入りとぶつかる週末なので、計画倒れの山歩きが多いですが、6月でないと咲かない花も多く、出掛けたい季節です。

石楠花は適期に山行をのがしています。コーンシング草は、やっと最近会いに行けた花ですが、近くに咲いていた雪割草やクリン草の方が、又会いたい花でした。コーンシング草の咲く山城は、五葉ツツジの木も多く、ツツジの花咲く季節も良いなと思っています。

7月、8月、9月は高山に咲く花を求めて今夏は、どこにいこうかと考えるのは、一番の楽しみ！ 南アルプスばかり通っています。10月以降、紅葉の季節になると山歩きしなくなるのが、私の悪い習慣と言うところでしょうか。又、花の季節の事ばかり考えて一年が過ぎて行くのです。

子供たちと登った山

細井 陽子

18才の夏、女性3人で白馬岳に登った。白馬尻小屋に泊り、翌日、雪渓を上った。ずっと雨だった。やっとのことで混雑する頂上小屋に到着。次の日も風雨の中、白馬大池に向けて出発。梅池あたりで日が射してきた....。

帰ってきてても筋肉痛で階段が登れず、散々の山登りだったが、どういうわけか山が好きになった。彼女たちは、その後も、仙丈岳や木曽駒ヶ岳などに登り、今でも良い山仲間である。

結婚相手も山が好きだったので、子供たち(H行とR二)が生まれてからも、夏休みなどに自然を求めてでかけるようになった。就学前は、尾瀬や乗鞍などの高原を歩いた。その後、子供たちの体力がついてくるに従い、高い山を目指すようになった。

北八ヶ岳(1991年8月・2泊3日)

朝東京を発ち、親湯から歩き始める。快晴。蓼科山の裾野から、亀甲池を経て、双子池に出る。秋の花、リンドウのつぼみがもう少しで開きそうだった。

翌日も良い天気。蓼科山がよく見える。2-3年前までは、まだ小さくて足が届かなかったRも、今では天狗の露地の大きな岩を軽やかに登る。北横岳から三ツ岳を越え、雨池峠に出るコースは変化に富んでいておもしろい。五辻をへて麦草峠に着いたのは午後4時。朝7時からよく歩いた。[H-中3・R-小5]

鳳凰三山(1992年8月・2泊3日)

家族に加え、Hの親友で同じ柔道部のN君も同行する。この年頃になると親より友達だ。社交的で明るいN君とはスキーにも2回ほど一緒に行った。1日目は青木鉱泉に泊る(お風呂がよかったです)。

2日目は8時にドンドコ沢を登り始めたが、11時頃、白糸の滝あたりで雨が降り始める。体力のある子どもたちはどんどん先に行ってしまうので、親は後からフーフー言いながらついていく。鳳凰小屋には2時半に到着。雨も止み、たき火で腰をとる。夜は、こたつを囲み、知恵の輪に挑戦。止んでいた雨がまた降り始める。

翌朝、晴れ間が出ていたので、6時半に小屋を出て地蔵岳まで登る。御座石に下りるか稜線を行くか迷ったが、結局縦走することにした。結果的にはずっと雨。

ほとんど休まず歩き通し、夜叉神峠に1時半に到着した。この時の経験から、後も全員の雨具や靴の装備をきちんと整えた。[H-高1・R-小6]

甲武信岳（1993年8月・2泊3日）

今回は、N君とお父さんも参加。台風一過の青空のもと、梓山を出発。ところが、モウキ平への道を間違え、三国峠方面にかなり歩いてしまった。どっと疲れが出た。この時先頭は私で、地図が読めないと非難ごうごう（？）ヒッチハイクで正しい道に戻り、3時過ぎに十文字峠への道を登り始める。

十文字小屋では、ストーブをたき、松茸を焼いて歓迎してくれた。この年は天候が悪く、泊まり客が少なかったそうだ（この日も、他にあと1人だけ）。小屋の前には湧き水が豊富にあるし、りすも訪れる。道を間違えたことをおじさんに言ったら、さっそく次の日に、方向を示す道標を分岐点に取りつけってくれた。感謝。夜は満天の星、ちょうどペルセウス座流星群の見える日だったので、みんなで夜空を見上げて楽しんだ。

2日目、甲武信岳までの尾根道は、原生林の美しい道だった。雲一つない天気で、山頂からは北アルプスをはじめ、360度の展望を楽しめた。夕日もきれいだった。

3日目、雁坂峠に向かう。雲海の上に、富士山が頭を出していた。大人は、西破風山への登りで息を切らす。縦走路は明るく、高山植物がきれいだった。N君のお父さんはかなり疲れたようだ。[H-高2・R-中1]

赤岳（1994年8月・1泊2日）

長男は、「難しいお年頃」で、今回は不参加。

美濃戸口から行者小屋に向かう途中、Rを先頭にして歩いていたが、気がついたら道に迷っていた。おかしいと感じながらも、まだ道らしきものがあるようと思え、どんどん進んで行ってしまった。崖のようなところに出て、いよいよ先がない。引き返そうと思うが、よく道がわからなくなり、あせりがでてきた。「ここは落着いて」と言い聞かせ、なんとか元の道に戻る。なぜこんな所でと思うようなケースだが、よい経験になった。

文三郎尾根のクサリ・階段は、サッカーで鍛えているRにとっては楽勝。親はマイペースで。頂上は展望抜群。暮れなずむ景色を楽しんだ。

日の出を見ようと4時半に起きたが、外は雨と風。戸惑っていると、友人のNAさんから声をかけられた。息子さんと職場の友人と登られた由。奇遇。実は昨日もRの中学校の友人一家にあったのだ。シーズンの山は、都会より知人に会

う確率が高いのだろうか。

覚悟を決めて、横岳の方向に降り始める。途中で雨が止み、ブロッケン現象があらわれた。初めて見る現象は不思議。自分の手を振る姿が影になって映るなんて、砲兵に羨む頃には晴れてきたが、赤兵方面はすっぽりと雲に隠れていた。

[R-中 2]

この頃から、子供たちは部活動や学校のことで忙しくなり、親にはつきあってくれなくなった。私も次第に子離れし、友人や夫と山へ行くことが多くなり、1996年の夏に新ハイ横浜支部に入れて頂いた。

これから、子供たちが登山を趣味にするかどうかはわからないが、自然の美しさや、山に登ってはじめて手にするものがあることを知ってくれただけでもよかったです。

1998年の夏には、HとR-2人で仙丈岳と甲斐駒ヶ岳に登ったが、その後はそれぞれの人生を歩み始めていった。



伊東直子

10年以上前に百名山登頂を終えた支部のSさんに、以前にいつ頃から目的を持って歩いたのか聞いたことがあります。答えは旅行が好きで旅をしているうち、名山を何ヶ所か歩いていることに気付き、それから始めたとのことでした。私も昔から旅が大好きで、会社の出張旅行を含めて、県庁所在地の殆どに宿泊していることになります。百名山は無理としても、日本中行っていない所はいくらでもあるので、機会を作って邊境辺地を歩き廻ってみたいと思っていますが、今までの面白い経験をいくつか書いてみました。

(清水次郎長)

北海道出張に航空機利用が認められなかつた30年以上前、よく青函連絡船で渡道していました。グリーンの指定席は、リクライニングシートで仮眠がよくとれて快適でした。青森を出てすぐ陸奥湾内で上り連絡船とすれ違うのですがダイヤの正確さに驚きました。函館の宿は駅の近くのB.Hで、深夜上り列車の到着時、駅員が呼ぶ「ハコダテー、ハコダテー」の声に旅愁を誘われたものです。その頃上野発の夜行列車に乗ると、就寝前に車掌が廻ってきて、住所・氏名を記入する乗船票を渡して翌朝回収に来ました。洞爺丸事件のあとで、氣を使っていましたが、何年か経つと乗船票を配りに来なくなりました。不思議に思って、寝台の上から通りかかった車掌に「乗船票は要らないのか」と聞いたところ「書いてもらっても半分位は清水次郎長か石川五右衛門で、意味が無いので止めました」とのこと。船の安全管理が徹底したせいでしょうが、時代を越えて清水、石川兩人とも庶民の人気者なのだと、変なところで納得しました。

(提督) 鶴見昇

四国松山は気候温暖、食べ物も旨く人情豊かで素晴らしい城下町です。これもその頃のことですが、出張の仕事が終ってパチンコで時間をつぶし一杯飲むかと手頃な店を探していたところ、伊予鉄松山市駅からお城に向って4~5分のところに客がよく入っている小さなおでん屋がありました。コの字のカウンターに10人も座れば満員になる店ですが客が「大根」「チクワブ」などと注文すると、背筋がピンとした60年配の主人が、いちいち「了解」「リョウカイ」とアクセントも力強く返事しています。元気がいいオヤジですねと隣の客に声を掛けると「海軍中佐で終戦を迎えた人で、世が世ならば提督です」とのこと。秋山真之以来多くの海軍の俊秀を生んだ松山ならではのことです。

(日本酒)

これは最近、鹿児島轟温泉でのこと。割合大きな宿で温泉が珍しいのか、近郷近在の車が駐車しており食堂も賑わっています。10人位のグループでしたが和室に座って「ビールと日本酒の燐」を注文しました。ビールはすぐ出ましたが日本酒が来ません。「まだか」と聞くと「込んでいるので暫し待って欲しい」とのこと。待つこと10分、シビレを切ら

して調理室へ行きヒヤでもいいと急がせましたが「込んでいる」一点張りでなかなか来ません。結局30分以上待って、お内儀が恐縮して燭を持ってきたのですが「店に置いてないので近くの町まで買いに行っていたもので遅くなりました」との事。鹿児島は焼酎の本場で日本酒を注文する客は居なかったんですね、店には済まない事をしてしまいました。



ハイカーのための読まなくてもすむ読書

和田 秀樹著 「75歳現役社会論」(NHK出版)

快晴、快調、仲間と食べようと秘めた一品。めざすは未知の山。

さっそうと集合地へ、と、しかしいつもこうとはゆかない。

ときにはどしゃぶり、ときには不調。そんなとき勇気づけてくれるのは本。

著者は受験制度肯定派で、おかしなタイトルで受験のノウハウ本を書いているが、精神科医、それも老人病院の精神科医だ。

かいつまんで述べると、人間は75歳まで体力、知力は衰えることなく、壮年期とほぼ同じ、その後やや衰えることがあっても、近ごろ介護保険制度でさかんに目にすることになった重度の介護を必要とするようになる老人は数百分の1、おおかたは最後までそれほど衰えはしない、というのである。

世のシステムもマスコミの報道も実情に合っていないという。従来の暗いイメージを一変する超高齢社会論とカバーにもある。

こんなことは先刻承知で目新しいことではない、とわがサークルの先輩たちは沢山の山行実績で証明していらっしゃる。

著者に報告しようか。

(伊東直子)

私の山登りと舞岡公園

波多野 良枝

新ハイに入会して4年目になります。山行は月1回か2回参加しております。皆さんの体力になかなかついて行けず、ついしり込みてしまいそうです。でも参加してみると大変楽しく又メンバーがその都度變るので、いろいろな方々のお話が聞けるのでとても楽しいです。深田久弥、田中澄江の百名山縦走コース（空撮登山ガイド）のビデオを集めて楽しんで見ています。花を見ながらのんびり歩くのが私の楽しみなので季節の良い時は友達4・5人でハイキングを楽しんでいます。又、ツアーハイキングにも一人参加しています。

百名山では今後挑戦して見たい山がありますので、体力の続くかぎり登りたいと願っています。関西方面の御在所山、大台ヶ原山、伊吹山、靈仙山、大江山に今年は行きたいと思います。

さて農業のお話ですが、私は市の緑化センターで「農業大学講座」を受け、その時の友達の勧めで「緑を守るボランティア」の会に入り3年が経過しました。田起しに始まって稻刈りから脱穀、精米にいたるまで、たくさんの作業をこなして、もち米を作っています。その他、雑木材の手入れ、農機具や作業道具の手入れ、水路の補修、畑の種まきから収穫まで一年中仕事に追われています。

お祭りをしたり、お月見、谷戸鍋や焼き芋、お赤飯などのごちそうを作り、皆で食べ収穫の喜びを楽しんでおります。

費用は年間千円（通信費）しか要らず、ウマイ話です。会員は子供から学生、公務員、サラリーマンと職業はいろいろ、リタイア後のおじさんやおばさんととても変化に富んでいて、社会勉強になります。

皆さんも是非一度舞岡公園へ日曜日に遊びにいらして、体験して見てください。きっとお気に召しますよ。

おわり



コラ(ナキ)

伊東 直子

ササンカ

岡野 達

佐野淳一郎

山で日本酒を注文する私は珍らしかった。他の登山者もいない事をしていたら、おもむろに「さあ今日はア」咲庵曰く「山岳登山」。十手をひき目車トテア「大人シトハ済大さるやエ」咲庵曰く「オケテチハ走ア」ふと振り向いて、「走行ア」に代わるやうに、山から帰って体の節々の痛さがとれてくる次の休日の頃になると、庭の片隅で暖かい陽射しを受けながら山靴の手入れが始まる。

水にザブザブとつけこんでドロにまみれた靴をブラシで洗う。底の凹部には小石やドロはしっかり食い込んで取り除くのはなかなか大変だ。小石はドライバーを使って取り除く。

山が終わった後のこの仕事は、心やすまるひと時であり、全身の疼痛を堪えながら歩いたこと、ウィスキーでお腹をチカチカさせながら饑舌となっている山小屋の夜のことなど、山の出来事の一つ一つを思い出させてくれる。しかし、どうしてか激しい雨と風に打たれて身を切る寒さに口をグッと結んでも、歯がガタガタするような辛い苦しい思い出はサッサッと通り過ぎていく。

皮に付けられた数々の傷は、歴戦の跡と使い込んだ象徴である。

この靴はもう十五年になる。その前の靴は二十五年使っていた。底の張り替えは三回済ませたが、年と共に靴の重さの方が気になり始めたので、ビラム底の靴に新調され、お役御免となった。靴底の張り替えは一回で終わりにするつもりで、山の道具屋の親父に張り替えを頼んだところ「未だ二回や三回は張り替えができる。今、新品を使ったって靴のほうで言うことを聞かないよ」といって三回張り替えてくれた。嬉しかったのは履き易さが変わらなかった。張り替えたばかりの靴を履いて足首を回してみたが圧迫されるところが全くない。その仕草を見ていた親父は「どうだ。文句はないだろう」と言わんばかりだった。こうして山靴は愛用品となつた。

店の親父とお客様との間でこういうやり取りがこの頃は全く見られなくなってしまった。古くから開いている街の店の文化や心意気はどうしたのだろう。こんな心意気を今の消費者は知らない。店でもお客様に伝えようとしない。

機械や道具は随分便利になってきた。ちょっと不便だと思えば安く買い換えることもできる。故障を直すより買い換えた方が割安に感じる。商店もその方が収入になるし面倒でないから、これは新製品だと、ここが便利だとか言いながら、しきりに購入を勧める。そこには巨大資本で全国展開をする販売店の有様がチラチラして、山の道具屋のような心意気は全く見られない。

使い込むことは、歴史と愛着が刻み込まれていることだ。登山靴、ベスト、黄色

いハンチング、いずれも愛着があるものばかりである。山の生活では、こうしたものに触れる機会が多いのは嬉しい。

すっかり洗い終った靴は、日陰干しにされ乾き上がった皮に保革油をたんねんに擦り込んで手入れは終わり、物置の片隅におかれて次の山行を待つばかりとなる。

山靴の手入れは、山の思い出とともに、使い込むという物への愛着を感じさせてくれる。



飯島 和子

癌と友達になつて

丹下友恵

1. 癌発見から手術までの経過

私は胃癌のため‘97年1月24日に胃と脾臓の全摘出の手術を受けました。癌の発見は会社の成人病検査でした。’92年3月末E石油会社を定年退職し、第二の職場としてココ山岡の件で有名になった日本信販株式会社にお世話になり不良債権整理の業務をしてきました。同社には厚生年金を受給しながら、私の様に再就職している方が多くいて、多種多様の業務の方が集まり、勤務場所も関内にあってそれなりに楽しい職場でした。ここは65歳の定年なので、その後の会社既定の健康診断で発見されました。

発見してくれたのは平沼にあるコンフォート病院で、健康診断を流れ作業的に実施する病院で、市内の有名企業が多数健康診断に利用している病院です。その間の経過は‘96年11月20日に成人病検査、11月30日に同院に呼ばれて写真を見ながら異常を説明され12月14日に胃カメラを呑んで組織検査をしました。12月21日に潰瘍が悪性であり癌であると告げられました。同院は健康診断が主流なので私の住所が磯子区のため根岸の日赤病院に行く様に指示、紹介状を頂きましたが、日赤は伯父が手術を失敗した経験があり、何か嫌悪感があったので先ず家庭医である内科の先生に相談して済世会神奈川病院に行きました。ここでもレントゲンと胃カメラから入院手術を薦められました。

当時の私の健康状態は自分なりに良好と考えており、職場が関内にある関係上週に2・3回は新しい職場の友人と呑んで帰宅し、支部でも11月16日～17日の支部創立40周年の塔ノ岳集中登山に参加して宮ヶ瀬まで歩いたりで病気の自覚症状は全くありませんでした。加えて当時マスコミ上で慶應病院の近藤 誠氏が文芸春秋他で従来のガンの手術、治療に警鐘を鳴らしている最盛期で、私も同氏の本を何冊か読み、手術しない方が良いのではと考え気がグラリグラリしておりました。

私の潰瘍は3つあり、内一つが大きく癌の進行度によって5段階診断がありますが、その真中位の大きさなので早い手術が良いと診断されていました。癌と判明したのが12月21日の年末でしたので予定していた12月30日から1月3日までの京都旅行にも行き普通の生活が出来たので、ますます迷う日々でした。開けて1月8日セカンドオピニオンも知りたいと大船の湘南鎌倉病院で受診しましたが、ここでも即日外科の先生と胃カメラを見た先生に手術を薦められました。この段階で手術をすることに決めて1月10日に入院しました。

2. 退院後のリハビリと考えたこと

退院は始めは2月21日であったが、病院内の階段の上り降り等張りきりすぎですかり体調を崩し食事が全く受け入れられなくなり、食事訓練を点滴からやり直して3月4日に退院しました。しかし家に帰っても食事が上手く取れず、食べるとすぐダウン症状になる状況が続き体重も40キロを切る状態になりました。菩提寺である龍頭密蔵院の住職に薦められて母も良く行った高野山の宿坊の一つ持明院に行き奉仕生活を3週間くらいし

ました。帰浜の際住職が「丹下さん私ど三つの約束をいたしましょう」と三つの約束をさせられました。

- ①怒ることは体にも悪く、良いことは一つもないで今後絶対に奥さんにも、子供さんにも、廻りの人にも、怒らないようにしましょう。
- ②今までの恩返しとして何か出来るボランティア活動を少しでもやりましょう。
- ③今後5年間で1000ヶ寺の巡礼をする。

の三つでした。③は半分くらいしか出来ないでしょうが①と②は今も守っておられます。

癌の手術によってハンディを受けましたが、よくよしても仕方ないので自分なりに前向きに考えて精神的にも向上したいと思うようになりました。最初に考えさせられたことは廻りの人のお陰で生かされていると痛感したことです。今まで偉そうに自分で生きていると考えていましたが、病気になり入院手術が決まると同窓の友人達が、手術を無事に終わらせようと動いてくれました。私など面識のないけいゆう病院の鈴木院長から私の入院する済世会に電話をするように手配してくれたので、病院では大げさに言えばVIP待遇であったし、入院中の家族、知人の励まし、退院してからの新ハイ支部の皆様の励ましはほんとうに有り難いものでした。つくづく廻りの人々の善意で生かされていると実感した次第です。

次に自分で手術後の人生は余裕と考えるようにしました。私が手術を受けたのは65歳になる寸前ですが、ここで一度人生が終わり、幸いに神様なり仏様のご意志によって生かされました。ここで一度人生が終わりあとは余分の人生を生かされていると考えると気持ちが非常におおらかになります。今生きている一日一日が有り難いものに思えてきました。この様に考えると何時か来るであろう死もそんなに恐くなりました。只死ぬ時は痛みのない死に方をしたいので、生きている間に多少よいことをして、そのご褒美としてそんな死に方をしたいと密かに願望して私の出来るボランティアをしている次第です。私が人より少し死にこだわるのは胃といっしょに脾臓を摘出したので退院時主治医より少しオーバーに手術後5年の転移率7.5%と宣告されているからだと思います。

手術後最初の支部山行は'97年5月17日の高川山でした。参加まで自分なりに足慣らしをして地図上でもこの位なら大丈夫と考えて参加したのですがやはり山はそんなに甘くはなく、完全にバテてしまい岡野さんにリュックを担いでもらう有様でした。この時は手術後始めての山行なのでお目こぼしを頂きましたがその節は大変お世話になりました。2回目は6月7日~8日の庚申山・備前櫛山で手術後初めての一泊山行でしたが、同行の方々に引っ張られて何とかついて行けました。省みますと支部の存在は入院中から何とか今一度山に登れるようになりたいと心の中での一大目標でした。この目標が私の体の回復に一大作用したのだと思います。併せて皆様の暖かいあと押しのお陰ですので紙面を借りて厚く御礼申し上げます。今後も私なりにもう少し頑張りますので宜しくお願ひ致します。

一番新しい山

長い長い道程で高度を稼ぎやっと辿り着いた頂は、鳥は去り花は終わってそこはもう冬だった。雲一つ無い青空と、青空を映す池塘と山あいの雲海の遙か彼方に富士が出現して呉れた山：会津平ヶ岳。雲は無かったが霜柱が立ち水溜りには薄い氷が残っていた。でも残雪・新緑と花の季節にもう二度訪れたい山。

男4人は、若いIさん、油の乗り切ったHさん、驚異的に若い肉体年令のSさん、老いの崖つ瀬で必死に堪えている私。エスケープ無し、ワンルート往復、日の短い

11月初め、独りでは躊躇するこんな山行を出来たことに山仲間はいいなァと感謝している山。

4つの山

第一の山は山登り：ひたすら高度を稼ぎピークを攀いだ若さの山行、遙か昔に終わった思い出の山登り。

第二の山は山歩き：社会人になり時間が出来た時に、得た時間を効率的に使った山行。慌しかった、何かに追われて歩いた山。

第三の山は山旅：終職で持った全て自分の時間を有効に使い、或る時は天候待ちの停滞、或る時は行程を小刻みにして、或る時はエスケープしての山行・山登りの青春とは違った山旅の第二の青春（6.5才迄と自分では決めていた）の山行。感覚的に標高は更に高く、行程は更に長く、荷は更に重く……。同じ山のはずなのにどうして？心構え、体力、カン、山登りで得たものがどんどん失われて行く今日此頃。でもあと2・3年頑張ってみようか。機会があればお誘い下さい、私も誘います。

第四の山は山暮らし山遊び：久恋の地、諏訪富士見でロケーションを楽しみ、流れゆく雲に想像を馳せ、天気が良ければ山に入り動物植物との会話を楽しむ。只今準備中。

21世紀での支部に想う

皆さんが参加しやすい、出来る、やりたい、やらせて貰いたい会に。支部の運営にも山行にも。どんな小さなことでも皆んなで考え、決める。そんな支部でありたいと思っています。

スギとヒノキの区別がつかなかった

岡野 達



山行などでいろいろな樹木や花を目にするが、名前がわからなく、悔しい思いをしていた。名前がわかったら、より楽しい山行になるにちがいないと思ったのは99年の春のことだった。

まず樹木名を覚えることにし、近所の公園や植物園に毎週のように通った。今では外出の折に樹木を見ると、心の中で、これはスギ、これはヒノキ、これはサクラと樹木名をつぶやく迄になってしまった。この習慣は今でも続いている。

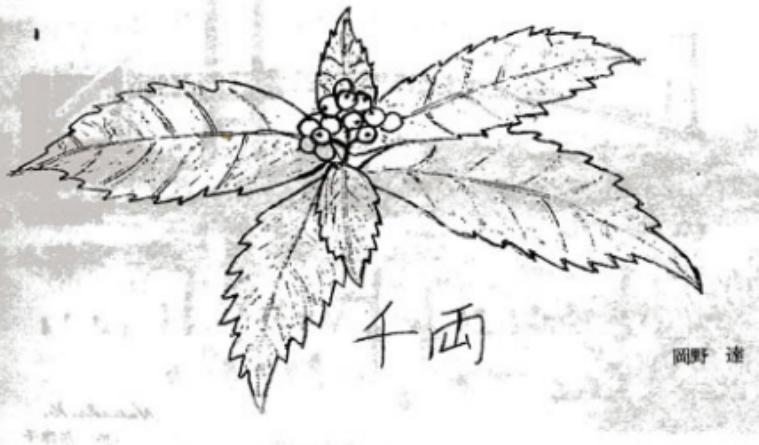
2000年3月には、第1回緑化試験を受験し、その結果は3級に認定された。

毎月、支部会報に花のスケッチを書かせてもらっているが、何を書こうかとあちこち探し回ることで、樹木ばかりでなく草花にも目を向けるようになった。最近は以前に較べて樹木への関心が薄れつつあったが、そのおかげで興味が持続し感謝している。

一つの花を描くのに1時間から2時間を要することがある。根気と集中力が要求される作業であるが、そのことは脳に刺激を与え、ボケ防止に役立っていると思われる。

12月2日の愛鷹山山行で確認できた樹木はスギ、ヒノキ、ブナ、アセビ、ヒメシャラ、である。2年以前の山行だったら、いずれの樹木名も自信を持って言えなかっただろう。読者はそんなこともわからなかつたのかと、笑うかもしれないが事実である。おぼえた樹木や花の名前は、あまたあるうちのごく一部にすぎない。また、高山植物は平地では見れないでの名前を覚えるのが困難である。

緑化に興味を持たなかつたら、我が家の猫の額のような庭にも、千両が、万両が、都忘れが植えられているのを、それらの名前を知らない故に、今でも気づかずいたかもしれない。



岡野 達

みらいに向かつて

村田 真理

私はただ今、五十八才。何ものにも束縛されない自由の身である。素晴らしい人生、これからも楽しい事、美しい事、うれしいことのみ考えて、喜びとして日々を過ごして行こうと思っています。これからさらに大切にしたいことは人との触れ合いです。利害も何もないやさしさ、さわやかな触れ合い、大切な友人、知人達と生きていることの素晴らしいを語り合いたい。そしてお互いが生き生きと輝くような、素敵な関係を作り上げてゆきたいと思っています。私は現在トルコブルーがとてもよく似合う年令になったと思う。今までの人生の体験は私の大切な宝もの、これから的人生を歩んでいく道しるべである。

現在私は孫が二人いる。上が今年小学校に入学の女の子、下が今年から幼稚園に入園の男の子、私には孫達は可愛い天使。いつも逢うと「大好き愛している」とキュッと抱きしめる。その触れ合いがたまらなく好き、無邪気に愛を受け入れ、まとわりつく天使達、限りない可能性が見え隠れする。どんな大人になるか楽しみ。

もうひとつの宝ものは世界のすべての人達の幸せを願う愛の言葉が好き。以前は高価なものに心ひかれた時もあったが、いつの間にか物質でなく、やさしさあふれる愛の言葉が好き、私は目にみえない大切なことを、もっともっと吸収して生きてゆきたい。

私はこんな宝ものが増えることを願っています。無限にひろがる心の宝ものをこの身に納め、プラス思考でこれからも生きてゆきたい。無限なる感謝。

2001年元旦



Natendo.K.

お台場海浜公園から（水彩）川野 奈津子

細やかな楽しみ

井上 忠秋

2000年夏から暮れに掛けて、東京国立博物館を中心に開催された、世界四大文明展を観ることができた。

時代は紀元前5000年から紀元600年位に亘る展示物が大小織り混ぜ出品されていた。

夏の一日職場を休み朝早いうちから上野の国立博物館に出向きエジプト文明展を観た。

黄金にかがやくエジプト王像やミイラなどに驚かされた。ナイル河のほとりに流れつく滋養分豊な土が農耕文化を発達させ、階級社会を生み出し、奴隸があのピラミッドを作り上げたと思っていたが、その後の調査で従事した作業人は休暇を取る時は理由を示した休暇願いを出して居たという記述のある石が発見されたことから奴隸ではなく自由人の職人である事が判明したという。

昼食後、隣の東京都美術館でインダス文明展を観賞した。

小さな手工芸品が数多く陳列されており、商取引に印鑑が初めて使われた物で「芋判」のごときである。この頃から契約の觀念が有ったとは驚きで有った。

インドやパキスタンの人達は縁日の露店でアクセサリーを売っている姿を良く見かけるが、国民性か、器用な人が多いようだ。

秋早い頃に中国文明展を横浜美術館で観た。

青銅器文明から唐代までの文物が展示されて居たが、陵墓から出土した壁画や兵馬俑の鮮やかな姿・形は現代迄生き続けてきたもの、そのものに思える。仏像や經典など佛教に関する物が多いけれど、西域の影響を受けた諸物に温みを感じた。やはり中国文明が一番馴染み深い。

晩秋になって、メソポタミア文明展を観た。会場は世田谷美術館である。砧公園の大きな敷地の中に建てられた瀟洒な美術館である。圧巻はかの有名なハンムラビ法典を刻んだ高さ2・3メートルの玄武岩で、「目には目を、歯には歯を」を含んだ282項目が楔形文字によって表現されており、これが文字の始まり、文化の源流との思いに刈られ私としては一番印象に残る物であった。

それぞれ地域は異なって居ても共通していることがある。

大河沿いの肥沃な土地に文明が興り発展し、大きな人口を抱え、秩序ある社会生活が営まれて居た。それが今ではどこも衰退し榮華のよすがも見ることの出来ない荒野か、農地に変わっている。

人々は神の存在を信じ、天に、地に、火に、木に、山にと人智の及ばないところを崇拜し、恐れおののき、そして味方にし、やがて人間の力が及ぶとなると神から離れていった。

紀元前5000年から4000年の頃に既に弥生時代を凌駕する文明があった事は驚きの極みであった。神へのお供えを真心を込めて作る事から精巧で美しい品となり、後世に残る遺産になった。伝統の技術、文化が今日迄脈々と生き続け居ていることを実感した。

今年は幾つかの絵画展や国宝展、インカ展などをみた。

今の私には国内や世界を飛び回って観て回る余裕がないのでせめて横浜や東京で開催される展覧会を楽しみにしている昨今であり、又これからも続けたいと思っている細やかな楽しみである。



象徴的彫刻 [インド考古館]



14世紀の住居 [Photo: ASI-G. Chiarini]



美術・美術古文書 [浜松歴史博物館]

アンコール・ワットを歩く

祖父川 精治

この国の人たちは、この国の人たちが布設した対人地雷による事故被害が今でも起きている。そのかず数百万個、1個の原価100円、探索除去費用は1個当たり約1万円という。指導者が変わったら、都会に住み暮す人たちを農作業従事のため全員農村へ即日強制移住させ、ために死者の数200万とも300万とも伝えられる。1000年余の遠い昔し、熱帯のジャングルの中に花咲かせ世界に誇る巨大なクメール石造文化を築いた人たちも同じ人たちである。

アジアの至宝といわれ世界遺産指定の、カンボジアのアンコール石造遺跡群も、1850年統治していたフランス人の宣教師によって深いジャングルの中から発見された。アンコール時代(1100~)に記された真臘風土記によると「周囲には百基の大小の石塔あり」と述べている。ここでは、歴史や美術的なことは専門誌に委ねることにして、かるい山登りやハイキングといった気分で、アンコール遺跡群を探ってみる。図書等からは想像もできない広大な地域で、60ヶ所も数える遺跡を細かく見学したら一週間は必要といわれるが、私たちは2泊3日とする。ガイドブックを手に全程徒歩は無理なので、ガイド付きの車を利用して代表的なものを巡り歩くことにする。欧米人トレッカーや観光客の一部に見られるように手軽にバイクタクシー(バイクの後荷台へ乗るもので非常に危険)の利用もある。

アンコール・ワットの拠点カンボジア王国のシェムリアップへは、乗り継ぎ便のよいタイのバンコック経由で行く人たちが多い。私は、雪が舞う関西空港からベトナム航空へ搭乗、ベトナムのホーチミンシティ(旧名サイゴン)で乗換え首都ブノンベンで一泊。日本との時差2時間。屋外へ出るとどっと汗が吹き出るような気温35度、ブノンベン市内見物の後、ジェット機1時間でシェムリアップ着。バス利用した場合は、悪路を250キロ10時間の走行が必要となる。

まだ日も高いので、念願のアンコール・ワットへ向かうことにする。途中、料金所がありこの国の人たちは通行自由、私たち外国人はアンコール遺跡群全てに通用する1日券20米ドル(約2200円)、6日間通用券60米ドル(約6600円)である。常時チケットを携帯していないと、6日間通用券分を徵収すると各所に、英文での掲示板がある。

アンコール・ワットとは、アンコール(大きい)ワット(寺)の意味で、古代クメール王朝が築いたヒンズー教の寺院であると共に王の靈廟である。じつくりと見学すると一日は要し、汚れやすいのでハイキングの服装が格好で、足下は暗いのでライトを使用する。灼熱の天を衝いてそびえる尖塔群、その影を映す広大な水濠は幅190メートル周囲5.4キロ。中央塔堂をぐるりと囲んで、クメール軍団や当時の生活、神の世界を織った絵物語風のレリーフがびっしりと刻まれ偉大な文化遺産といった美の第1大回廊(180メートル×2面、200メートル×2面)がある。

塔門の壁面に刻まれた無数のデバター(女神)たち、かつて王宮の女官や舞姫がモデルであったといわれる。滞在中のホテルで演じられた、民族舞踊の踊り子達の衣装がこのデバターとそっくり同じであった。第2大回廊(100メートル×2面、115メ

ト \times 2面)を見て、中央塔堂は高さ65メートル、第3回廊(60メートル \times 4面)へ向かって人の昇降を拒否するような急峻な階段がある。四方を向いた石の階段の内、東側のみスチールの観光用手すりが取り付けられており、それを頼りに登る。地元の子供たちは、見ていると素手でスイスイと登りくだりして危い。建物は人びとの住居を仮定したものではなく、神仏や王の靈廟として建立したものであろう。

正徳5年(1715)日本人として始めてこの地を訪れた、森本右近太夫が石柱に残した墨の落書きを見る。遙かに遠い天竺(インド)の祇園精舎と見誤ったものである。わが国やフランスの援助で、今も続けられている遺跡救済チームによる復旧工事が各所で見られる。

アンコール・ワットから北へ約2知、アンコール・トム(大きな都市)へ向かう。1辺が約3知四方の城壁に囲まれた中心にあるのがバイヨン(美しく気高い天上の塔)寺院。高温多湿ジャングルの中、環境悪化で崩壊の危機に晒されている。幾つもの石のブロックを積み重ね、四面を向き觀世音菩薩と伝えられる数十体の人面塔の深い神秘的な微笑み。これだけの素材の岩石を、どこからどのように運んできたものかと感心する。

周辺には幾つもの石造寺院があるが、アンコール・トムから東へ約2知のタ・プロム(老プラフマーの神殿)が必見の寺院である。あっと思わず息を呑むような榕樹(ガジュマル)が、各所で建造物を被い潰して破壊が進み、石造寺院が悲鳴を上げているようだ。宝物探しが目的の、心ない盜賊たちによる破壊も盛んであったという。

限りなく広がる大平原、アンコール・ワットとアンコール・トムの中間に標高100メートル位のちっぽけな小山、ブノム・バケン(石塔のある山)がある。夕陽を浴びて黄金色に輝くアンコール・ワットの眺めが有名。(往復1時間)昔、大量の石材を引き上げた直登ルートと、象のタクシーが登る緩い山道がある。頂上からは、雨期になると水域が2倍に広がるという東南アジア最大のトンレサップ湖も遠望できた。古代クメールの王たちは、この小山を中心に据えて広大な寺院や靈廟、都を建設していくに違いない。日が暮れて、ジャングルの中から一斉にセミが鳴き出した。寒い如月の頃なのに、はるか遠くへ来たなという異国への旅の想いがぐっと胸に迫る。

フランス人が東洋のモナリザとよんだ、繊細華麗なデバター浮き彫り石像群の多いパンテアイスレイ(女の砦)ヒンズー教寺院。美しい紅色砂岩を使用して、瀟洒な宝石箱と伝えられている。アンコールから東北方へ30知、歐米人には人気があり車利用となる。雨期の出水洪水に備えるため、高床式の家屋が目立つ村々が多くあった。



外國語の楽しみ

永井和男

大学の教養課程で初めて第二外国語のドイツ語に接した。当時の先生はほとんどが旧制高校時代の古ダヌキ、いや古つわものである。第一時間でアーベルツエー (a b c)、次ぎの週は Ich bin ein Knabe イッヒ・ビン・айн・ケベ (私は少年です) や定冠詞 der des dem den テル・デス・デム・デン程度のことをやったと思ったら第三週目からいきなりヘッセの「青春は麗し」Shöne ist die Jugend シーン・イスト・デイ・ユーゲントの原書を読んで訳すのが授業となつた。まだドイツ語の右も左も解からん奴等に対して何たることか。一字一句ドイツ語辞書のベタ引きしかねない。おおらかと言うか、無責任と言うか、旧制高校とは斯くなるものだったのか、「解からなければテメエで勝手に勉強しろ」である。もう皆がバニックと言うか半分ノイローゼとなってしまった。そのうち高橋健二訳の岩波文庫を先生に見えないようにテキストにはさんで割当個所を読んだ後は名訳をわざとタドタドしく訳す名案がクラス中に蔓延した。古ダヌキはすでに我等の悪業に気が付いているのに最後まで知らん顔していた。こんな調子で他の先生も同じ穴の貉である。それから2年間というものが常にバニックだから当時の訳させられた原書名を今でも覚えている。灼熱の恋、ベルリンの恋物語、近代に於ける精密自然科学の基礎問題の変化なんて言うカチンカチンのもあった。表題は今でも原語で言える。友達と飲み屋で「マチュース伯父さんまでが僕の帰郷を人並みに喜んでくれた。舞踏のボリーも羽をばたつかせて…」などと高橋健二訳の「青春は麗し」の冒頭をかなり長く暗記していておどける奴もいるがもう45年も前の話が酒のさかなとなる。私の世代がドイツ語の花文字(亀の子文字)の参考書を使った最後の世代であろう。ヒットラーがやった二つの良いことはアウトバーン(高速道路)の建設と亀の子文字を廃止して普通のアルファベットにしたことだと言われている。

一国の言語を学ぶことは、言葉だけでなくその歴史、文化、生活習慣、政治経済活動、等々に興味を持つこととなり、関係する書籍類に目が止まりつい読んで見たくなるものである。つまり好奇心の充足と精神の活性化につながる。特に会社卒業後の单调な生活の打破、ひまつぶしの武器にはもってこいのものだと思う。将来が望めるで無し、どうせ今更に使うが解からんことやつても無駄じゃないか、と言う人もいる。そういう理屈なら何をやっても無駄だから何もやらない、あとはボケを待つばかり。真昼の地下鉄の中で憩居老人風(といつても明らかにオレより若そうなのも多い)の人々がもうやらんでもいいロープタイの首輪などでオシャレなんかして、本を読むわけでもなく、吊り広告を好奇な目で見るでなくただウツロな目をしてポーッとしている。学生時代の友人にも歩かない、読まない、酒飲んで議論もしない、ただ定年退職者の集まりだけ楽しみにして、あいも変わぬ会社関係の懐旧談がいたが、ついに脳梗塞で入院、皆で見舞いに行って、帰りに飲み屋で見舞いそっちのけで談論風発、聖書からポルノまでそれぞれの薙蓄のご披露である。吉川英治のことば「逢う人みな師匠」である。「こんどの海外旅行はどこどこに行くべえ」で別れた。

入社後初めてのボーナスで買ったのがドーナツ盤20枚のリングフォンのアメリカ語(イギリス語ではない)、枕元に小型プレーヤーを置いて毎晩寝についてから寝るまで20枚全部を丸暗記して見た。若かったものだ8ヶ月で全文を暗んじた。それでも英語ペラペラとはほど遠い。電機メーカーに勤める友人が面白いから来ないかと誘った所が、高輪のフレンド英語学校、学校といつてもただのシモタヤの洋館、近くに普連土女学校があるが関係無い。会社から徒歩20分、週3日。アンソニー・ザレツキーという人が校長兼先生、その他の先生は全部カナダ人である。フリートーキングである。正体不明のアンソニーは変った人で日本語ペラペラ

だけでなく行書も草書もすらすら書き、しかも鏡文字（左右逆さま）でも書ける。ダグラス・ロジャースという講道館で柔道をやっているのも週1回は先生、22才の大男。それから3年後ダグラス・ロジャースは東京オリンピックのカナダ代表柔道選手、猪熊と対戦して銅メダル、金メダルはヘーシングだった。カナダの英語はイギリス語（クイーンズ・イングリッシュ）である。

転属で職場が墨田区になったので2年で止めた。ことは筋肉と同じ、使わなければ衰える。ネイティブ・スピーカーと話す機会があるうちは磨かれる。止めると恐ろしい速さでガタ落ちになる。逆のことは朝会社を訪ねてきた英米人とグッモーニング・ナイスチューミーチューの時はギクシャク、昼飯の頃はかなり良くなってくる。夕方ディナー接待で飲み出す頃はとぐっと良くなる。最後にホテルに送り届けて別れる時になると「あなたの英語はヴェリーエクセレント」ウソつけ。只飲みのオセジだろう。

独身の頃、毎晩酒ばかり飲んでいては能が無いナンカスルコトネーダベカと考えていたら通勤途中の地下鉄茗荷谷の駅に拓殖大学語学研修所の広告が出ていた。受付の女性に何がいいかと聞いたら、ロシア語なんかどうだと言われてしばらくロシア語に通って見た。ロシア文字（キリル文字）は32文字、13世紀にキーリクというギリシャ正教のお坊さんが文字を持たないスラブ民族の為に、ギリシャ文字で文字を作ったやつだ。だからロシア文字はギリシャ文字に近い。しかも一音一文字であるから読みやすい。横浜の港にロシアの船が泊まっていたら船名を一字づつ読みれば良い。ブ・ア・イ・ク・ア・ルと読めたらバイカル号である。英単語のようにデタラメ発音ではない（クナイフがナイフ、ブサイコロジーがサイコロジーなんてことはない）。かしこまった時以外はBe 動詞は省略だ。「哲学は科学である」なんて言う時はフィロソフィア・イエスチ・ナウカなどと言うが、人類初の女性宇宙飛行士テレシコアが言ったように「ヤー・チャーイカ」わたしはカモメ、だけでよい。全体にカタコトみたいだ。「カップの中に水があります」を英語で言ったら There are some water in a glass.になっちゃうがロシア語は「フ・スタカネ・バダー」つまり英語だと In glass water でよい。

定年近くになった頃、たまたま本業にあまり関係無いある部品を韓国に輸出する仲介を本業以外にやることになった。最初にソウルで会った先方の専務は日本語が出来る「何年生まれか」と聞かれたので1935年と答えたなら「昭和10年でしょう、私は昭和12年です。東京で生まれました。終戦の2週間前に私だけ釜山の祖父母のところに帰られました。父母はその後日本人になり父は中野区会議員を長くやってます。小学校2年で帰ってきたのに良く日本語を忘れませんねと聞くと「日本語を使うとうるさかったのですとイヤホーンでNHKを毎晩聞いて努力してました」と。会長も社長も私よりうまい日本語を使う。あとで解かったのは日本の新聞や本を読むとき、目は日本文を見ているが、そのまま韓国語で読んでいる。その逆も出来る。日本語と韓国語は語順も文法もほぼ同じだからこんな芸当が出来るのだ。バイリンガルどころではない。欧米の高級ホテルにインターブリターと言うのがいる。横で英語でしゃべるとキーボードの指はフランス語やドイツ語で打ってくれる人だ。その逆も出来る。年配の韓国人はインターブリターどころではない。実に羨ましいやら悔しいやらと感じた。

日本から部品を買ってもらうのに、これから長くお世話になるのに韓国語が全くダメとは恥ずかしい。早速NHKのアンニョンハシムニカ・ハングル講座を始めた。週イチであるが横浜国際交流ラウンジで市立大の韓国留学生の女性から韓国語を習った。女子学生から習ったから先方の若い課長さん達から「ナガイさんのことば、すこし女子ことば（ヨジャマル）ですね」とからかわれた。5年間やって、仕事も終了したので韓国語は止めた。前述のとおり止めたらトタンに言葉はがた落ちになった。

中国語は世界人口の4人に1人が話す言葉、もちろん国連の公用語だ。大手の商事会社でも英語はあたりまえ、英語のバーを越えたら次ぎは中国語のバーを越えろだ。韓国語を止めて、今度はラジオ中国語講座のテキストを買った。これも週イチであるが久良岐ライオンズクラブ後援の中国留学生援護会の中国語教室に入った。定年の1年前だった。留学生の出身地は北京、天津を始め北は大連、長春、ハルビン、南は上海、武漢、雲南省の西双版納（シーサンバンナ）のタイ族のお嬢さんまでいて朝星晚と30クラスもある。横浜国大を主として、市大、東大、東工大、学芸大などの国費留学のまじめで優秀な学生達が先生である。授業が終わると先生を飲み屋に誘う。中国各地の風俗習慣など、言葉以外のことでも知ることが出来る。支部仲間と北京に行ったとき、現地ガイドの楊（ヤン）嬢が「あなたはもう三分の一は中国人です。中国のことを何でも知っている。留学生達から吸収したのでしょうか」と言われた。

中国語と言ってもたくさんある。大きく分けて北京語、蘇州語（上海語）、福建語、廣東語、客家語、など7ヶ国語。方言ではない全く違う言葉だ。中国人どうしでも通じない。留学生会館の中で中国留学生達が中国将棋をやっていたが、お互いに日本語でやっていた。なぜ中国語でやらないのかと質問したら「だって何を話しているか解からないから日本語でやっているんだ」。公称56民族の国だ。一つ山越えればことばは通じないと言われる。こまかく分けると2000語以上とも言われる。我々が学ぶのは北京語を基本にした人工語である中国標準語の普通語（ブートンホア）であり、昔はこれを北京官話と言った。普通語とは普く通じる言葉の意である。新聞、テレビ、ラジオ、学校で使う言葉は普通語である。だからテレビには現地語の字幕が入る。台湾、シンガポールも学校では普通語、教室を出ればそれぞれの現地語を話す。年寄りを除いて彼等はこぞってバイリンガルなのだ。

中国語話順が実に良く英語に似ている。英語をある程度知っていると学びやすい。I am a Japanese. は 我“是”日本人（カーナリーバンク）、Let me see. は 給 我 看々（ゲイ・ウカ・カンカン）だ。よく一つの外国語をある程度マスターした人は他の外国語を学ぶのが早いと言われる。入門クラスでよくあることだが「わたしは中学、高校で英語が大嫌いでダメでしたから、漢字を使う中国語ならば」と入ってくる人はすぐ止めてしまう。英語が嫌いだったのでなく、勉強が嫌いだっただけである。

50万円も払って英会話学校へ行って「ウドケードー、ナイチャーミュージュ」で終わって「やっぱし私は能力が無かったんだわ」とあきらめる人がほとんど。ああいうところはかなり出来るがネイティブと話す機会が無い人が更に磨きをかけるために行くところだ。大阪の地下鉄内の英会話学校の広告では「あなたは3ヶ月でペラペラになる」ような绮大廣告は禁止で、広告の下部に「外国語の習得には本人の努力が必要です」の一項を入れなければならない。大阪市の条例である。

外国语を最も安く、しかも最高の先生について学べるのはNHKのラジオ、テレビである。ひと月350円のテキスト、今は留守録のできる安価なラジカセがある。朝起きたら巻き戻しをして次のテープを入れ替えればよい。昔は放送時間に自宅にいなければ、その日はバスになったが今は好きな時間に聞ける。だからいま3台のラジカセにテープを入れている。テレビはプログラム録画ができるから一台で良い。最近、MDを1台買ったが今のところ最高に便利だ。巻き戻しなど必要ない。一瞬にして消去が出来るし、5分きざみで録音時間が設定できる。今、ラジオで英、仏、中、の3カ国語、テレビで英、英、仏、中、韓、の計8プログラムをやっている。そんなにやって疲れないかと思うかもしれないが、そんなことはない。ラジオは毎日各20分、テレビは週1回で各30分である。テレビは入門編が多いからテキストは買わない。在職中は横浜品川間の2分と昼休み、移動中の車の中、時には通りがかりの公園のベンチでやった。ある程度やったら語学留学して

日本語を断つてしまわないと本物にはならない。先日も北京からの飛行機の中で隣にいた北京外国语大学の女性の先生から「定年後北京に留学する人が多いです。あなたもぜひそうしなさい」と言われた。そうするつもりだったが、いまはアルバイトで某しかのお小遣いが入るので、それが欲しさで実現しない。

話は別だが、県立高校では通学にはウォークマン持帯禁止だ。私が校長なら高校生たる者はすべからく通学途上はウォークマンで英語の学習をせよと言うだろう。図書館の自習室によく通うが、ここもウォークマン禁止である。しかし私は守らない。ロックミュージックのシャカシャカ音もそれが迷惑になるからが理由なのだけかるが、外国语の学習で音もれで隣の人に迷惑することはない。だから守らない。自習室の私語についてはかなり前に「静かにしろ、私語を慎め」と何回かわめいたら、最近は非常にマナーがよくなつた。U.S.J.(ウル・サイ・ジジ)の勝利だ。飲食禁止については漢字が読めないらしく、机の上にペットボトルや紙パックジュースを置いて床をベタベタにしているのが多い。

さて、カタイことばかり話したのでこのへんでそろそろオチにする。21世紀はグローバルな時代、製品名や子供の名前を決めるときは注意しないといけない。

アメリカの自動車会社がNOVA(ノヴァ)と言う名の自動車をブラジルで売ったが一台も売れないと。ポルトガル語でノヴァは「故障する」だから。

最近ではほとんどの家がガスが漏れたり地震が来るとガスが自動的に止まるガスマーターとなっているが、これを今はマイコンメーターと言っている。某ガス会社(実は私のいた会社なのだが)では最初は「私の安全」と言う意味で「マイセーフ」の名で設置し始めたが、社を訪れたアメリカ人に大笑いされた。マイセーフとはアメリカではHのとき使うオカモトさん、コンドーさんのことだった。

花子(ホオアズ)とは中国語で乞食のこと、花(ホオア)とは無駄使いする意である。無駄使いした結果が乞食である。花子と付けるなら華子がよい。春洞や春草という雅号の人が名刺をだすと中国人に「ご冗談でしょう」とクスクス笑われる。女性自身や恥毛のことだから。書家の町春草さんも気を付けないと。韓国語で動物の子をセキという。口げんかの時「イ・セキ」(このガキ!)とか「ケ・セキ」(この犬コロ野郎!)と罵る。伊闈さんや閔さんが自己紹介すると韓国人はニヤリとする。

昔モスクワの日本大使館の駐在武官に海老原少尉と言う人がいたが、レセプションの会場で大声で「エビハラショーアイ」と呼び出されたら、列席の紳士淑女が大笑した。ロシア語で女性のナニをエビと言い、ハラショ一はすばらしいの意、ロシア語はBe動詞を省略する言葉だからエビ・ハラショーと聞こえたのだ。

戦後外務大臣をした岡崎勝男は戦前ローマオリンピックの陸上短距離選手、「カツオ・オカザーキ」と放送されると、スタンド中「カツオ、カツオ」と大声援だったそうだ。イタリー語で男性のナニをカツオと言う。ローマの日本大使館で食事に日本のお吸い物を出したら、イタリ一人がたいへんおいしいスープですが何で作りますかの質問に大使夫人が「カツオの汁で味付けします」。

越路吹雪の本名は河野美保、イタリー語で女性のアレはコーノ。ミホ・コーノは「私のアレ」、入国審査官がニヤニヤした。フランス語ではコンと言う。文化庁長官をやつた今日出海はフランスに行くとき外務省に頼んでパスポートをイマ・ヒデミとしてもらったそうだ。

紙面の都合で割愛するがこんな話は枚挙にいとまがない。今、社名や製品名を付ける時、国際的に問題が無いかを調査するコンサルタント会社が大流行である。

おわり

山のプランをたててみましょう

澤野正明

当横浜支部会員の皆さんには、登山を主目的とする会に入られたのですから、当然、或る目的を持って登られていることでしょう。例えば、山の魅力を載せている本を見て私も登ってみたい、健康促進の為、都会の喧騒から逃れたい、平地には無い新緑、美しい花々、紅葉、雪という四季の美しさを堪能したい、或いは、植物分布、地質等の学術的見地から等々、様々な想いを込めて参加されていると思います。そして、その想いを満たすべく、会として計画を立てて頂いております。

しかし、積極的に山歩きのプランを立てて、実行する方は限られているのが現状です。計画が決定すると何人かの方々がこれに参加します。中には参加するものの、完全にオンブにダッコ型の人も結構います。地図を見ない、時刻表を見て確認しない、只、参加して楽しみたいという方がいます。これでは進歩は望めません。机上でもいいから、山行のプランを立てる楽しみを味わって見ませんか。忙しくて暇がない、そんなこと嫌だ、大変だと思わないで下さい。プランを立てるには、地図、時刻表、ガイドブック、時には、各市町村の独自の資料も必要になります。地図の地形を見て側面図を作つてみると、山の形、険しさ、植物の分布等も判ってきますし。そして、その山を想像するという楽しみがわいてきます。ガイドブックによって行動時間も知る事が出来ます。もちろん地図からも、およその行動時間は作れます。これと、ガイドブックを併用すれば、ほぼ間違いはありません。計画したタイムと、実際に行動したタイムを比較してみると、自分の力（行動時間）が判り、次ぎのプランを立てるのに役立ちます。なお、その山に到るまでの状況も調べます。JRや主な山のバス等は時刻表に載っていますが、細部にわたるものでは有りませんから、それは、各市町村、又は地方の交通機関に問い合わせて下さい。

現在当支部では、毎年山行計画を決めるのに、行きたい山という欄を設けて、皆さんの要望を受け、計画を立てて実行しています。これをどうでしょう、只、行きたいというばかりでなく、その方がプランを立てて希望することにしたら如何でしょうか。係にならなくてもいいのです。係は別に依頼し、貴方はサブとして立派に参加することが出来るのです。

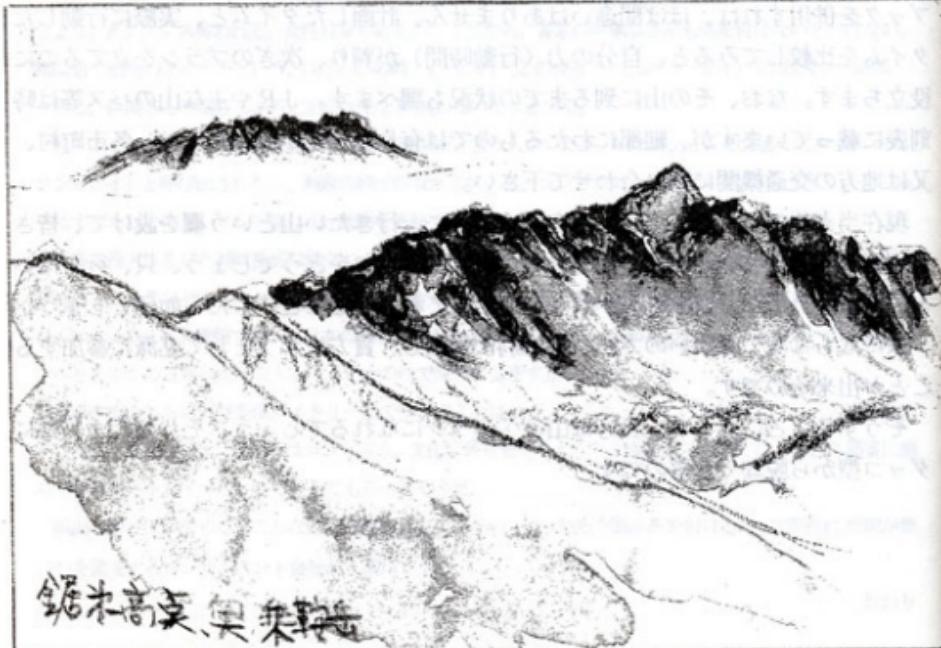
そうすることによって、貴方は山のベテランになれるでしょう、そして、オンブにダッコ型から脱却できるのです。

中央線鉄道唱歌 拾遺

♪汽笛一声新橋を——で知られる鉄道唱歌は明治33年作詞 大和田健樹 作曲 多 梅雅
で新橋から神戸まで、歌詞は66番まで。中央線鉄道唱歌は明治44年作詞 福山寿久 作曲
福井直秋で飯田町から辰野・塩尻経由で名古屋まで、歌詞は70番まである。私達がよく乗る八
王子から上諏訪まで駅名の出てくるところだけ拾って見ると以下の如し。さて駅名はいくつあり
ますか? 勿論お山のペテランにはすぐ解かります。ナヌ? 私は戦後生まれだから古い駅名はワ
カンナーメです。浅川・与瀬・日下部は現在の高尾・相模湖・山梨市です。

- ・日野や豊田も打過ぎて/行けば武藏の八王子/^{出立}機織の葉の名にし負う/町の栄えぞ著き
- ・色浅からぬ淺川の/^{かげ}紅葉林に日は落ちて/草より出でて入る月の/^{かげ}山の端近き与瀬の駅
- ・甲武二州の国境を/^{さへ}越ゆれば雲の上野原/^{さへ}四方津の嶺は峨々として/^{さへ}翼をかえす鳥沢や
- ・積雲^{たまくも}凝りて滴りて/^{さへ}玉なす水の桂川/^{さへ}岸千仞の断崖に/^{さへ}かかるや猿橋虹の如
- ・大月駅に下り立ちて/^{さへ}南へ馬車の便を借り/^{さへ}富士の高嶺の雲分けて/^{さへ}千古の雪を踏むや見む
- ・いで武士の初狩に/^{さへ}手向けし征箭のあとふりて/^{さへ}矢立の杉も神さびし/^{さへ}雀子の山の峠路や
- ・武運尽きたる武田氏が/^{さへ}重岡の中に陥りし/^{さへ}天目山は初鹿野の/駅より東 二里の道
- ・海の幸ある塙山の/^{さへ}温泉に遊ぶ夕間ぐれ/^{さへ}晚鐘ひびく恵林寺は/^{さへ}夢窓国師の大伽藍
- ・さし出の磯の村千島/^{さへ}鳴きて過行く日下部や/^{さへ}石和の川に夜をこめて/^{さへ}鵜飼舟にや棹おさむ
- ・今は旅ちよう名のみにて/^{さへ}都を出でて六時間/座りて越る山と川/^{さへ}甲府にこそは着きにけり
- ・煙草の産地竜王や/^{さへ}蘿崎駅の車窓より/^{さへ}新府の址を弔いつ/^{さへ}登る日野春 小瀬沢
- ・芙蓉の嶺に送られて/^{さへ}列車は進む高原の/^{さへ}海拔三千二百尺/^{さへ}ここは信州 富士見駅
- ・北には仰ぐハケ嶺/^{さへ}麓は青柳 茅野の里/^{さへ}湖水に臨む上諏訪の/町は商業榮えたり

(水井)



一編集後記

◇王様の耳はロバの耳、もの言わざるは腹ふくるるわざなり。山行の時、飲み屋での反省会などで各人の周囲だけの会話でなく仲間全員に話しかけることが出来ること。活字の効用ですね。◇おかげさまで原稿たくさん集まりました。ありがとうございます。◇初めて出版社と製本屋をやらせていただきました。前回経験者熊谷製本KK社長は転圧用の手製の板やロープを持って駆けつけて下さいました。編集委員、その他委員の方々、会社を休んでまでも印刷工、製本工を朝からやってくださいました。ありがとうございます。◇ボランティア（自主的）とは参加に喜び、生甲斐を感じること。志願兵のことともボランティアと言います。そう言えばむかし♪ヒトのイヤがる軍隊に志願で来るよなバカもあるーなんて歌がありました。◇本職に発注したら何十万円もかかります。部数が少ないほど高くなります。今回は紙代程度で済みました。ボランティア万歳！。◇昨今の日本経済の低迷は年寄りが貯金ばかりしていて使わないからとの説あり。罪なことしてしまったのかなあ。◇我が家のパソコン難しい丹沢の地名、尼寺（ニンジ）、法論堂（オロンド）、三日本（ミカゲ）など単語登録してましたが、最近新しいソフトに変えました。日の規模ら〇と変換されたので一人でツツハハハ・勿論さっそく檜洞丸と単語登録しました。◇オソマツなところ沢山あると思いますが、素人が手製でこれだけやったんです。皆さん全員ジャマイカ共和国に移民してください。ジャー・マアー・イイッカーとご容赦の程を。（永井）

平成12年度支部委員会

支部長	小池 廣治	支部委員	井上 忠秋	支部委員	永井 和男
副支部長	佐野淳一郎	〃	石部 正子	〃	平野 寿辰
〃	澤野 正明	〃	石川 雅子	〃	細井 陽子
支部委員	有山 好子	〃	佐々木静子	〃	森脇 弘
〃	飯島 和子	〃	芹沢 隆久	(委員名	50音順)

「羊齒」31号 編集委員会

熊谷 松治 佐野淳一郎 澤野 正明 永井 和男 平野 寿辰

(50音順)